

奥田大池遺跡



広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

I	はじめに	1
II	遺跡の立地と環境	2
III	調査の概要	4
IV	奥田大池遺跡A地点	6
	a 検出遺構	6
	b 出土遺物	16
V	奥田大池遺跡B地点	25
	a 検出遺構	25
	b 出土遺物	30
VI	奥田大池古墳	43
	a 墳 丘	43
	b 石 室	44
	c 出土遺物	46
VII	ま と め	52

例 言

1. 本書は、都市計画公園事業—鏡山公園整備事業—に伴う奥田大池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員道上康仁、沢元保夫が担当した。
3. 遺構・遺物の実測、写真撮影は、道上、沢元が行った。鉄器の処理は、伊藤実の指導を受けた。また、遺物の実測は別府大学生妹尾周三君の協力を得た。
4. 本書の執筆は、1を小部隆、その他は道上が執筆し、道上が編集した。

凡 例

1. 遺構については地点ごとに一連番号を付し、その前にSB：竪穴住居跡、SK：袋状竪穴遺構、ST：古墳の分類記号を用いた。
2. 本文中に用いた方位はすべて磁北である。
3. 挿図と図版の遺物番号は同一である。
4. 第1図の「奥田大池遺跡周辺遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（清水原）を用いた。

I はじめに

昭和57年7月12日、広島大学統合移転地内の埋蔵文化財発掘調査を行っていた広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査室は、広島県史跡鏡山城跡北麓一帯で立木伐開が行われているのを確認した。この地域は、かねてより弥生土器が散布するというので、その範囲及び内容は明らかでないものの、周知の遺跡として知られていた。このため同調査室では、この立木伐開は何らかの土木工事に伴うものではないかと懸念し、広島県教育委員会（以下県教委）に通報した。県教委では、この地域についてはかねて広島県都市部が都市計画公園である鏡山公園の造成を計画していたことがあったので、この事業の再開の可能性もあるとして、直ちに都市部都市整備課に連絡をとった。この協議では、都市部は(1)この立木伐開は鏡山公園整備事業に伴うもので、事業は昭和57、58年の両年度で行うこと、(2)周知の遺跡とは知らず工事に着手しようとしたことは遺憾であったが、工事は予定どおり行いたいので県教委の協力をえたいこと、(3)現状のままでは予定通りの工事はできないので、範囲及び内容確認のため県教委は予定地内の試掘調査を早急に実施してほしいこと、また、(4)この調査が終了するまでは造成工事を中断することの4項目についての意向であり県教委はこれに対して了解をした。この協議に基づいて県教委では、7月19日から23日までの6日間用地内の試掘調査を実施し、この中で2か所（奥田大池遺跡A・B地点）あわせて約4,000㎡に弥生時代住居跡群及び古墳が存在していることを確認した。この調査結果に基づいて、7月27日、現地でこの取扱いについて実際の工事を担当する広島県東広島土木建築事務所（以下東広島土木）と協議したが、この結果、(1)遺跡の範囲約4,000㎡のうち南端の約1,000㎡については緑地のまま保存すること、(2)当面は遺跡の範囲外で工事を行うこと、(3)年度内で調査が可能か否か両者でさらに検討することの3項目について了解した。また県教委では財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下埋文センター）へ調査日程の調整を打診したところ、9月から10月にかけてなら調査が可能であるとのことであったので、日程の空日をまって調査を実施するよう依頼した。東広島土木は8月14日付けで土木工事の届出を提出し、また県教委は都市部からこの調査費の子算を配当替し、埋文センターにこの調査を委託した。

調査は9月20日から11月26日まで約2ヶ月間、埋文センターが県教委の協力を得て実施した。

なお、この調査にあたっては東広島市教育委員会、広島県都市部都市整備課、広島県東広島土木建築事務所、広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査室、株式会社中国建設から有形無形の協力をえた。記して謝意を表したい。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

東広島市は、広島市の東部に隣接し学園都市建設にむかって新たな一歩を踏み出した都市である。人口は年々増加の傾向を辿り、現在約8万人を数える。通過する経緯度（県立農業試験場所在地）は、34°27'N、132°45'Eで海拔212mである。また、他地域と比較して東広島市は、県南部の海岸部と北部の高位山地部の間に位置しており、山陽道沿いの地域では標高の高い（200m前後）ところにある。年平均気温13.7℃、年間平均降水量1,545mmで、気候は県南部の瀬戸内型と北部の山地内陸型の中間に属している。

東広島市周辺の地形は、北部に脊梁山地に属する白木山山地、南部に吉備高原に属する世羅神石高原山地の延長面と2つに大きく分けられる。西条盆地は、後者の世羅神石高原山地に含まれる山間浸食盆地である。また、この地域を流れる河川は、最上流部となっており、河川の集水面積が小さいのが特徴となっている。

奥田大池遺跡は、東広島市西条町御蔵宇字清水奥山、宇奥田及び宇鏡東谷地内にかけて所在する。遺跡は、西条盆地の中央部寄りに位置しており、南に鏡山（標高335m）がそびえ、北には奥田大池が満々と静かに水を湛えている。すなわち、鏡山から派生する尾根は、標高275m以上は急峻な地形となっているが、奥田大池付近はなだらかな丘陵である。その南から北にのびる丘陵上に当遺跡は立地している。

次に周辺の弥生・古墳時代の遺跡について簡単に述べることにする。

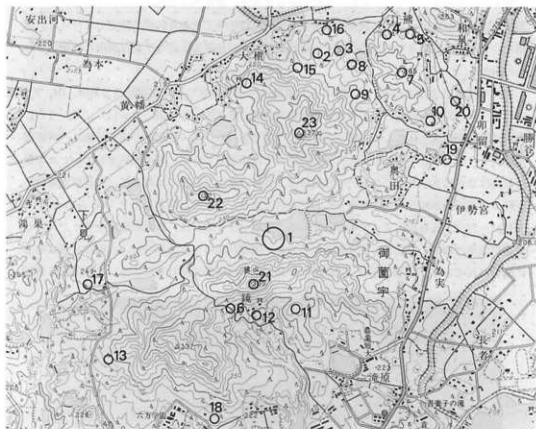
近年、東広島市では、広島大学統合移転、西条第一土地区画整理事業等に伴う土地造成事業により新たな遺跡の発見があいついでいる。

弥生時代の遺跡については、前期は断片的な資料しか知られていないが、中期以降では多くみられる。集落跡の調査例としては、鏡西谷遺跡、助平2号遺跡、西本遺跡、徳政遺跡等が知られており、丘陵上に立地した遺跡である。墳墓では、狐が被跡、鏡向山遺跡、西本遺跡、藤が追遺跡等が存在している。特に、鏡西谷遺跡、助平2号遺跡は、丘陵の急斜面に住居が営まれており、最近このような立地の遺跡の調査例が増えつつある。

古墳時代になると、前半期に属する白鳥古墳、スタモ塚第1号古墳、三ツ城古墳といった首長墓クラス古墳が構築され、他に藤が追第1号古墳、夫婦茶屋古墳等がある。後半期に入ると、古市古墳、鏡千人塚古墳、壺ヶ崎古墳、宗近御国第1号古墳等の竪穴式石室を内部主体にもつ古墳、あるいは千野九古墳群、石ヶ瀬すくも塚古墳等の箱式石棺を内部主体にもつ古墳がある。そして横穴式石室を内部主体にもつ古墳は、6C後半～7C初頭の花ヶ追古墳群、鏡東谷古墳、西ガガラ古墳等が知られている。以上、概観してきたが、当地域における墓制は、弥生時代の伝統を根強く持つ箱式石棺が古墳時代に入っても継承され、さらに後期において竪穴式石室という前期古墳にみられる墓制も採用されている。そして、横穴式石室の導入は、6C後半を待たなければならなかった。

〈主要参考文献〉

- (1) 広島県教育委員会『三ツ城古墳』『広島県文化財調査報告』第1集 1954
- (2) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』第9集 1971
- (3) 広島県教育委員会『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』1973
- (4) 広島県教育委員会『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』1975
- (5) 広島県教育委員会『西本遺跡群』1976
- (6) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 | 1982



第1図 奥田大池遺跡周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 奥田大池遺跡 | 2 助平2号遺跡 | 3 助平1号遺跡 | 4 助平3号遺跡 |
| 5 古市遺跡 | 6 鏡西谷遺跡 | 7 狐が城跡 | 8 三ツ城古墳 |
| 9 八幡山大池古墳 | 10 古市古墳 | 11 鏡千人塚古墳 | 12 鏡東谷古墳 |
| 13 西ガガラ古墳 | 14 大旗神社古墳 | 15 大旗古墳群 | 16 助平古墳 |
| 17 平木池遺跡 | 18 東ガガラ遺跡 | 19 道照遺跡 | 20 才ノ木古墓群 |
| 21 鏡山城跡 | 22 陣ヶ平城跡 | 23 八幡山城跡 | |

Ⅲ 調査の概要

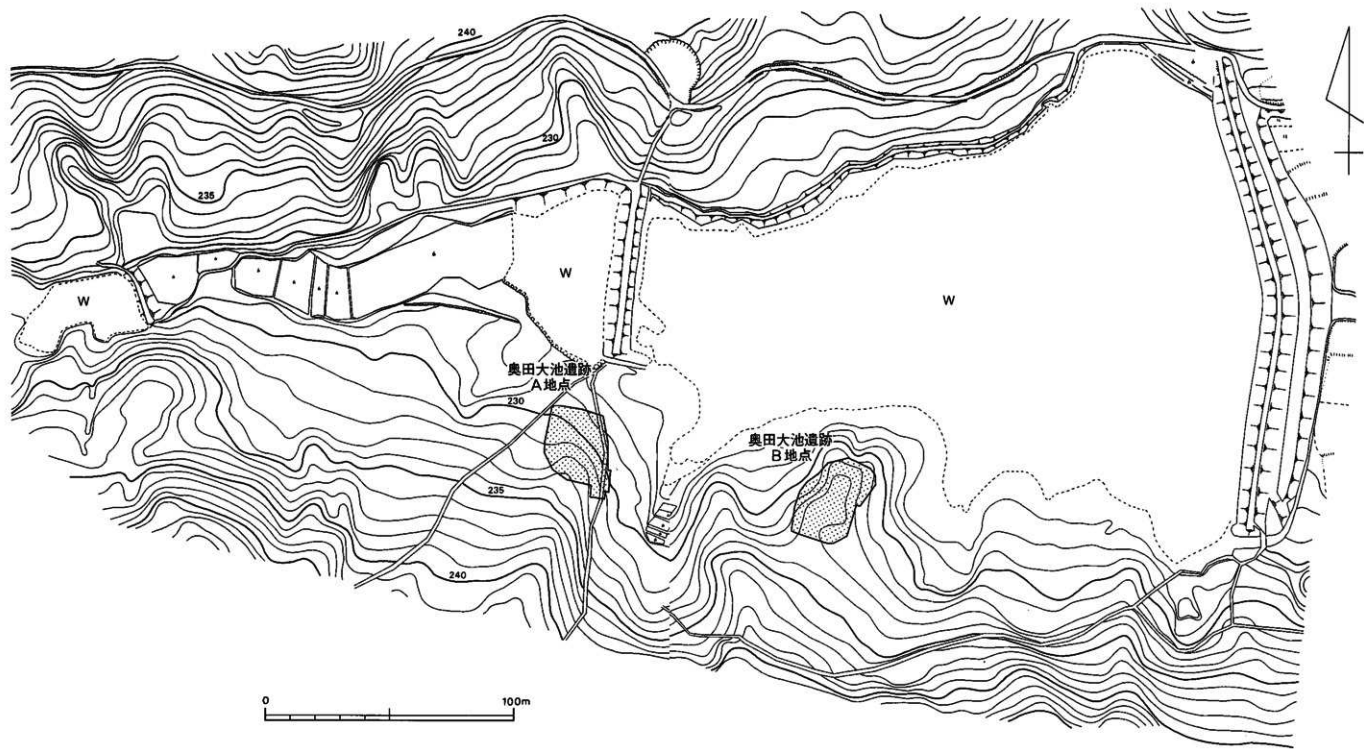
調査対象範囲は、試掘調査の結果を踏まえ、公園の進入道路となる池堤の東方の丘陵をA地点、A地点よりさらに西方へ約100m離れた丘陵をB地点とした。A、B両地点とも標高230～235mの南から北へのびる丘陵上に位置している。

A地点は、基盤層（地山）まで土の堆積が約10～30cm程度であったため、人力により遺構検出面まで土の除去を行った。また、丘陵斜面の下方では基盤層まで約1～2mの深さがあり、遺構は確認されなかったため調査は丘陵頂上部と比較的ゆるやかな斜面に限定して行った。遺構は、その比較的ゆるやかな斜面にそれぞれ造営され、丘陵頂上部の平坦な場所には確認されなかった。

調査の結果、当地点において検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡（SB01, 04, 10）3軒、それと同様な時期と考えられる袋状竪穴遺構（SK02, 05～09, 11～14）10基、さらに横穴式石室を内部主体にもつ古墳（ST03）1基であった。竪穴住居跡の遺存状態は、斜面側が流失しており不良であったが、SB10に関しては床面まで非常に深く掘込まれていたため保存状態は良好であった。この地点の住居跡は、3軒点在しているのに対して、袋状竪穴遺構は、丘陵の東西両斜面に5基ずつ群在して設けられており、それぞれ群としてとらえられよう。SK11～14は、SB10によって切られている。古墳（ST03）は、後世の破壊をうけ、天井石、東西両側壁は崩落し、腰石も抜き取られており、遺存状態は不良であった。古墳はSB10の上に構築されており、主軸方向は、N-87°-Eをとりほぼ西に開口している。ST03, SB10,



発掘作業風景



第2図 遺跡の周辺と調査区

SK11～14の先後関係は、SK11～14→SB10→ST03となっている。

出土遺物は、ST03から須恵器（杯蓋、杯身、高杯、碗、壺、甕、提瓶）、耳環、鉄鏝がそれぞれ出土した。各々の竪穴住居跡からは、壺・甕・高杯・鉢形土器・手捏土器など出土した量が少量である。石器は石鏃、石錘、砥石が出土した。袋状竪穴遺構からは、甕・高杯・鉢形土器が出土したが、全体的にみると少量である。また、SK02の西の斜面下方で上部から転落した状態で、弥生土器片の集中部が認められた。遺物は、壺・甕・高杯形土器が出土した。

B地点は、基盤層（地山）までの堆積が約30～50cmに及んでいた。さらにA地点と同様に丘陵斜面の下方は、基盤層まで約1～2mの堆積をみ、トレンチ下部から水が湧きだして遺構は確認されなかったため、調査は丘陵頂上部と斜面に限定し、遺構検出まで重機により土を除去した。遺構は、丘陵の東側斜面にそれぞれ造営され、丘陵頂上部あるいは西側斜面には認められなかった。しかし、調査区の南に続く丘陵の東側斜面に、弥生土器片が多数散布しており、遺構の存在が想定できよう。

調査の結果、当地点において検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡（SB01～03）3軒のみで、その他の遺構は認められなかった。竪穴住居跡は、すべて丘陵の東側斜面に位置しており、東側部分が流失していた。

出土遺物は、竪穴住居跡から壺・甕・高杯・鉢・器台形土器など出土し、SB03においては刀子がみられた。遺物量はSB02が最も多い。また、SB02の南側約4m、SB03の北側約4mの斜面下部平坦面に、上部より転落した状態で多量の土器の集中部が認められた。遺物は壺・甕・高杯・鉢形土器がそれぞれ出土した。

Ⅳ 奥田大池遺跡A地点

a. 検出遺構

調査の結果、当地点で検出された遺構は、弥生時代中期末から後期初頭にかけての 堅穴住居跡（SB01, 04, 10）3軒、それに同時期と考えられる袋状堅穴遺構（SK02, 05～09, 11～14）10基である。これらの遺構は、南西から北東にのびる丘陵斜面にそれぞれ造営されていた。

SB01（第4図）

SB01は、SB10の南約8mの比較的ゆるやかな南西斜面に営まれていた。南西部分が流失し、北側は土壌によって切られているため規模などの詳細は不明であるが、床面の長径5.75mを測り、比較的胴の張った隅丸方形を呈する堅穴住居であったと想定できる。支柱穴と考えられるものは、P1, P2, P3, P4である。P1—P2とP3—P4の距離は2.2mと同様な間隔であり、P2—P3は3.2mである。そして、他にP5, P6, P7といった不整形のピットが存在する。また、住居跡の中央にP8, P8の北東の壁に寄ったところにP9などの不整形で比較的浅いピットがみられた。壁高は北東側の高いところで58cmを測る。壁溝は住居の北隅でとぎれ、幅5～25cm、深さ4～9cmをそれぞれ測る。住居跡の埋土は赤黄褐色土、暗黄褐色土、淡黄褐色土である。出土遺物は少量であった。

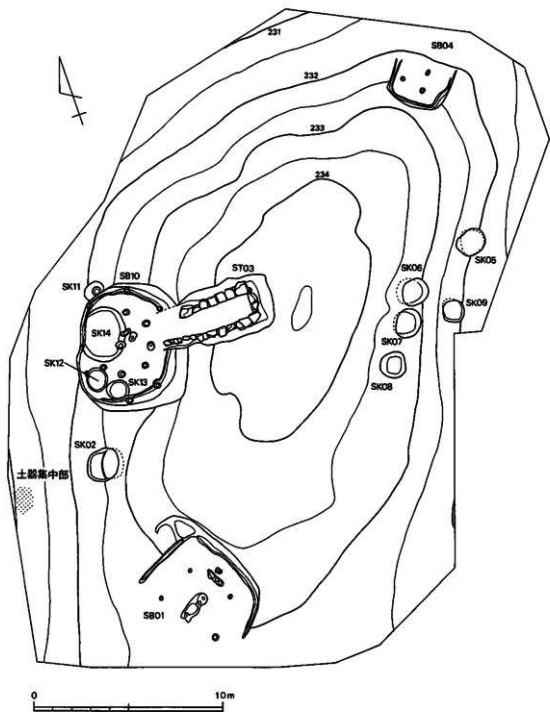
SB04（第5図）

SB04は、丘陵の北東斜面に営まれていた。SB10から北東へ約16m、SB10から北東へ約26mのところに位置している。北東部分はSB01と同様、流失しているため規模などの詳細は不明であるが、床面の長径2.66m程の隅丸方形を呈する小形の堅穴住居であったと想定できる。支柱穴と考えられるものはP1のみで、他に比較的浅いP2, 不整形で浅いP3が存在し

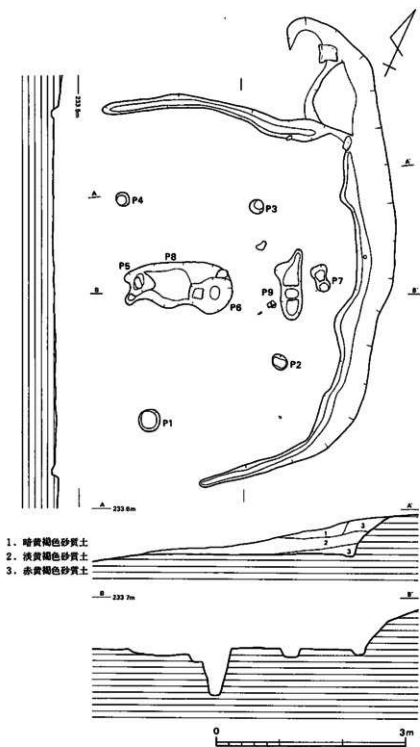
ている。壁高は西南側の高いところで72cmを測る。また、壁溝は幅5～15cm、深さ2.5～6cmを測り、全局に及んだかどうかは不明である。住居跡の埋土は淡黄褐色土、褐色土、黄褐色土であり、大小の礫が北半に集中して流れ込んでいた。出土遺物は少量であった。



SB10土層断面



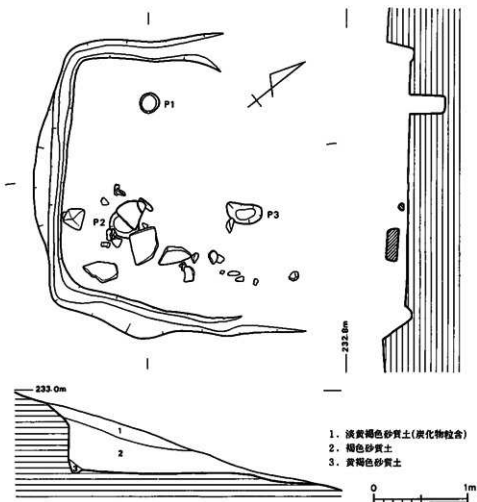
第3図 奥田大池遺跡A地点遺構配置図



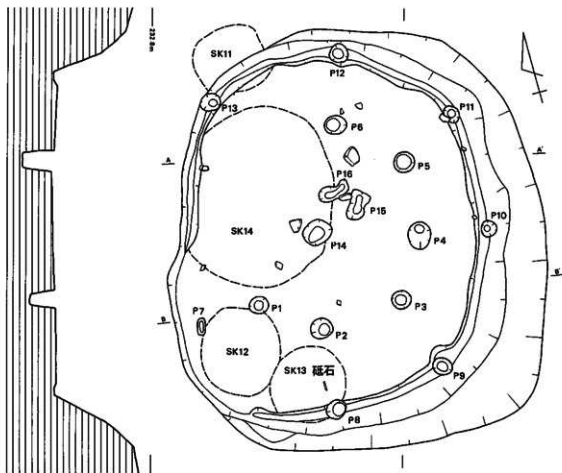
第4圖 SB01實測圖

SB10 (第6図)

SB10は、丘陵の西側斜面に営まれていた。ST03が上部に構築されていたが、遺存状態は比較的良好であった。床面の長径5.35m、短径4.4mを測り、平面形態が橢円形を呈する壁状住居跡である。主柱穴と考えられるものは、P1、P2、P3、P4、P5、P6といった径約30~40cmの各ビットである。その各主柱穴に対応する径約30~35cm程度の小形のビット群—P7、P8、P9、P10、P11、P12、P13—が壁溝中に存在する。各々主柱穴との関係は〈P3 ↔ P9〉、〈P4 ↔ P10〉、〈P5 ↔ P11〉、〈P6 ↔ P12〉、〈P x ↔ P13〉であるが、P13と対応する主柱穴は検出できなかった。各主柱穴間の距離は、P1—P2は1.15m、P2—P3は1.3m、P3—P4は1.15m、P4—P5は1.12m、P5—P6は1.3mである。

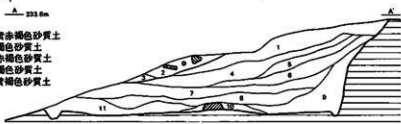


第5図 SB04実測図



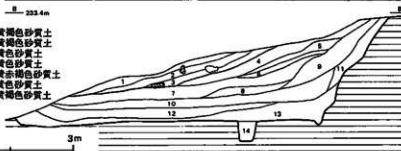
セクションA

1. 明黄褐色砂質土
2. 暗黄赤褐色砂質土
3. 暗赤褐色砂質土
4. 暗褐色砂質土
5. 暗黄赤褐色砂質土
6. 暗赤褐色砂質土
7. 暗黄赤褐色砂質土
8. 黒褐色砂質土
9. 淡黄褐色砂質土
10. 暗黄褐色砂質土
11. 淡黄褐色砂質土



セクションB

1. 暗赤褐色砂質土
2. 暗黄褐色砂質土
3. 暗黄赤褐色砂質土
4. 明黄褐色砂質土
5. 暗黄褐色砂質土
6. 淡黄褐色砂質土
7. 暗黄赤褐色砂質土
8. 淡黄色砂質土
9. 暗赤褐色砂質土
10. 淡黄赤褐色砂質土
11. 淡黄色砂質土
12. 淡黄色砂質土
13. 暗赤褐色砂質土
14. 暗黄褐色砂質土



第6図 SB10実測図

壁溝中にある各ピット間の距離は、P7-P8は2.25m、P8-P9は1.8m、P9-P10は2.3m、P10-P11は1.93m、P11-P12は2.05m、P12-P13は2.2mをそれぞれ測る。また、床面中央に径約40cm程の比較的浅いP14があり、さらに近接してP15、P16といった不整形の浅いピットがみられる。そのP16の埋土には黒褐色土が認められた。壁高は東側の高いところでST03の掘方の基底面より約160cmを測り非常に高い。壁溝は幅3~25cm、深さ2~9cmを測り、全周には及ばず住居の西隅でとぎれている。住居跡の埋土は、自然堆積を示している。セクションAでは4層、セクションBにおいては1層（それぞれ明黄褐色土）が、ST03の整地面に相当し、それらの下部がST03構築以前の堆積層である。また、床面直上に約30×35cm、約20×20cm程度の硬が2個みられる。出土物はSB01、04より比較的多い。

SK02 (第7図)

SB10の南側に位置し、2段式の袋状堅穴である。当地点の袋状堅穴の中で最も多量の土器を出土した。1段目の床面は、不整多角形を呈し、北側の隅の床面直上に数点の土器片が認められた。2段目の床面は、不整多角形に近い楕円形を呈し、1段目の床面より約50cm程掘込まれている。入口は西側に片寄り、東側の壁面は内湾して床面に連する。土器は、床面より約30~40cm上部あたりに出土した。

SK05 (第7図)

SK06の北東に位置し、床面が不整多角形を呈する袋状堅穴である。壁面の状態は比較的良好で、入口から床面に向かってゆるく内湾している。

SK06 (第8図)

SK07の北側に位置し、床面が不整多角形を呈する比較的大形の袋状堅穴である。入口は東側に片寄って開口し、西側の壁面は深く内湾している。壁面は床面より約20cm上部あたりが最もふくらんでいる。

SK07 (第8図)

SK06の南側に隣接して設けられており、床面が不整形を呈する袋状堅穴である。SK07と同様、入口は東側に片寄って開口し、東側、西側の壁面は、床面から入口に向かってすばまっている。壁面は、床面より約50cm上部あたりが最もふくらんでいる。

SK08 (第8図)

SK06、SK07とはほぼ同一線状に位置し、床面はややふくらみを持ち隅丸方形を呈する比較的小形の袋状堅穴である。入口は床面の真上に開口している。

SK09 (第7図)

SK07の東側に位置し、床面が不整多角形を呈する比較的小形の袋状堅穴である。試掘トレンチのため斜め半分を削りとられており、規模などの詳細は不明であるが、西側の壁面は床面に向かって内湾している。



SK11土層断面

SK11 (第9図)

SK14の北側に位置し、床面が楕円形を呈する袋状堅穴である。床面の中央部に約45×45cm、深さ約10cm程の比較的浅いピットを有している。調査中、入口付近が崩壊してしまったが、入口は床面の真上に開口していたと考えられる。SB10によって切られている。

SK12 (第9図)

SK14の南側に位置し、床面が不整多角形を呈する比較的小形の袋状堅穴である。SB10によって切られており、上半部を失っている。

袋状堅穴である。SB10によって切られており、上半部を失っている。

SK13 (第9図)

SK12の東側に隣接して設けられており、床面が不整多角形を呈する比較的小形の袋状堅穴である。SK12と同様SB10によって切られており、約半分以上上部を失っている。SK12との先後関係は不明であった。

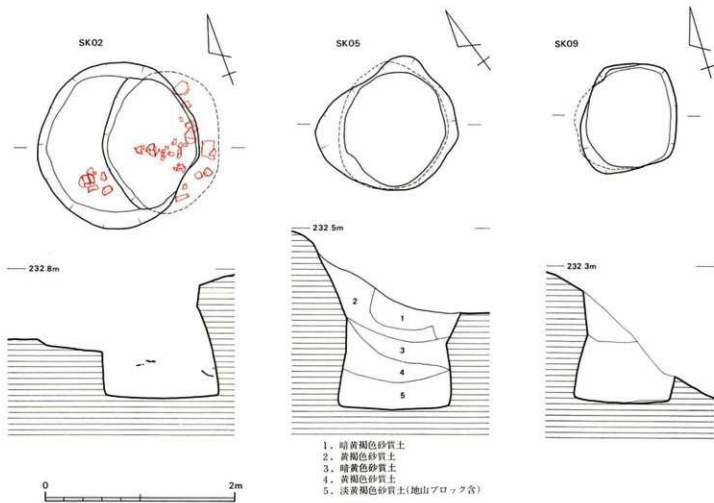
SK14 (第9図)

SK11の南側に位置し、床面が不整多角形を呈する大形の袋状堅穴である。床面に幅約5～15cm、深さ約3～5cm程の全周する壁溝を有している。また、床面はやや凸レンズ状になっている。SK11、SK12、SK13と同様、SB10によって切られており、上半部を失っている。

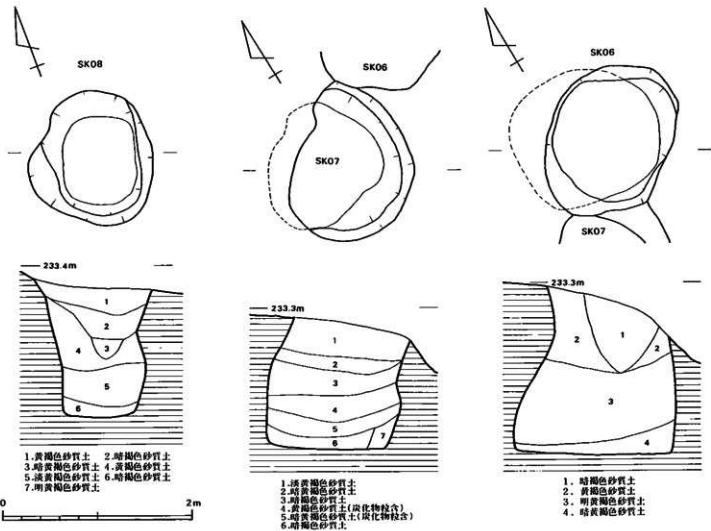
袋状堅穴遺構一覧表

(単位 m)

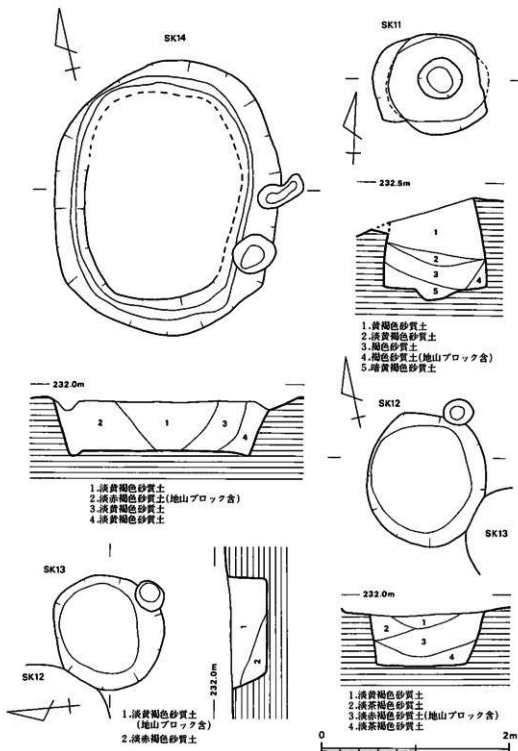
番号	床面形態	上縁径	底面径	深さ	床面標高	出土遺物の有無	出土遺物	備考
SK02	楕円形	2.12×1.42	1.51×1.17	0.73	231.42	○	甕、碗	2段式
SK05	不整多角形	1.47×1.41	1.35×1.15	0.57	230.58	○	土器片	
SK06	不整多角形	1.54×1.29	1.53×1.39	1.65	231.97	○	#	
SK07	不整形	1.66×1.24	1.33×1.13	1.75	231.80	○	高杯	
SK08	隅丸方形	1.45×1.31	0.95×0.76	1.38	231.80	○	土器片	
SK09	不整多角形	1.13×1.01	1.03×1.03	0.75	230.86			
SK11	楕円形	1.11×1.08	1.08×0.89	0.95	231.38	○	土器片	ピット有り
SK12	不整多角形	1.40×1.25	1.13×1.03	0.54	231.45			
SK13	楕円形	1.22×1.15	0.49×0.41	0.38	231.43			
SK14	不整多角形	2.90×2.36	2.28×1.65	0.52	231.30	○	土器片	壁溝有り



第7図 袋状堅穴遺構実測図



第8图 袋状竖穴遺構実測图



第9図 袋状竈穴遺構実測図

b. 出土遺物

土器 (第10, 11, 12図)

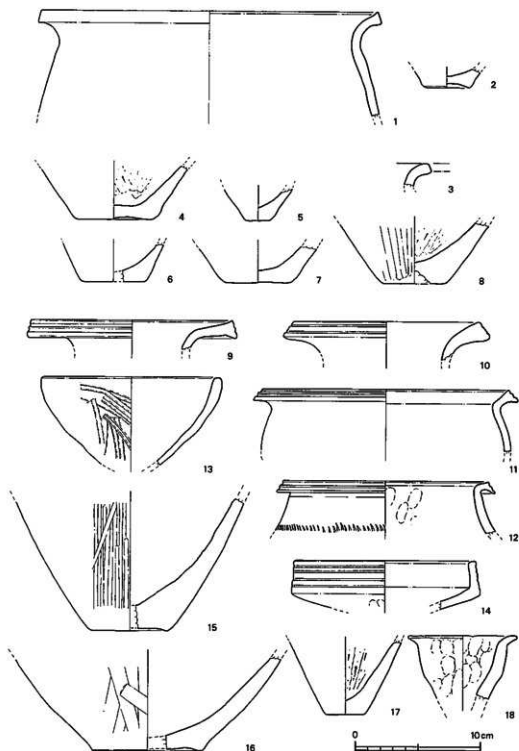
調査により当地点で出土した土器は、弥生時代中期末から後期初頭にかけての所産と考えられる。各々住居跡からの土器の出土状態は、床面直上にあるものは少量であり、遊離しているものが目立った。SB01, 04からは甕形土器, SB10は壺・甕・高杯形土器のセットをなし、他に鉢形土器, 手捏土器が出土した。袋状堅穴遺構からの出土土器は、他遺跡にみられるような多量な土器が「投棄」された状態を呈しているのはSK02のみであり、他の袋状堅穴遺構よりは少量で細片が目立ち器種は不明であった。SK02は甕・鉢形土器, SK07は高杯形土器がそれぞれ出土した。さらに、SK02の西の斜面下方で上部から転落した状態で比較的多くの土器片が出土した。器種は壺・甕・高杯形土器がセットをなしている。個々の詳細については別表のとおりである。

石器 (第13図)

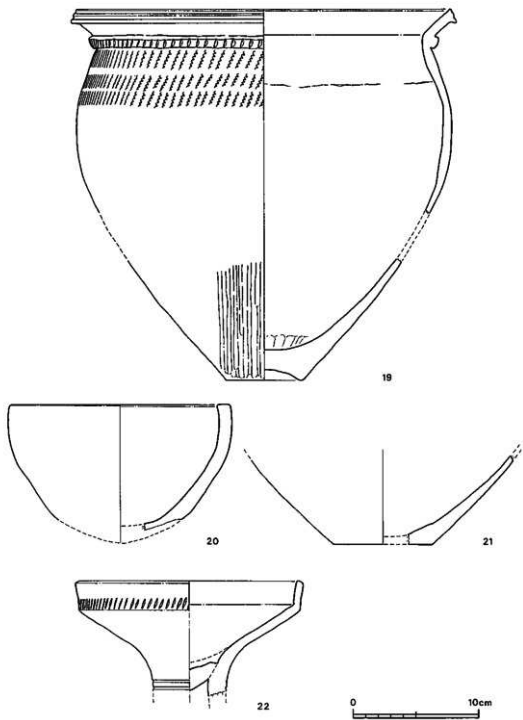
石錘 1は、自然円礫の石材を素材とする有溝石錘である。形態はスタンプ状を呈する。糸掛けの溝は全周するがさほど深くはない。長さ4.7cm, 幅4.8cm, 厚さ4.2cm, 重さ168gをそれぞれ測る。SB01出土。

砥石 2は、比較的硬質の石材を素材とする小形で不定形の砥石である。作業面は、表裏とも3面で、凹はさほど顕著ではない。長さ7.1cm, 幅3.3cm, 厚さ1.6cmを測る。SB01出土。3は、2と同様比較的硬質の石材を素材とする角柱状の砥石である。約半分程度破損している。作業面は、2面のみで凹みはさほど顕著ではない。現存長さ4.1cm, 幅2.4cm, 厚さ2.0cmを測る。SB01出土。5は、比較的硬質の石材を素材とする角柱状の砥石である。作業面は2面のみで、凹みは表面が顕著に皿状を呈している。長さ11.2cm, 幅2.1cm, 厚さ1.4cmを測る。SB10出土。

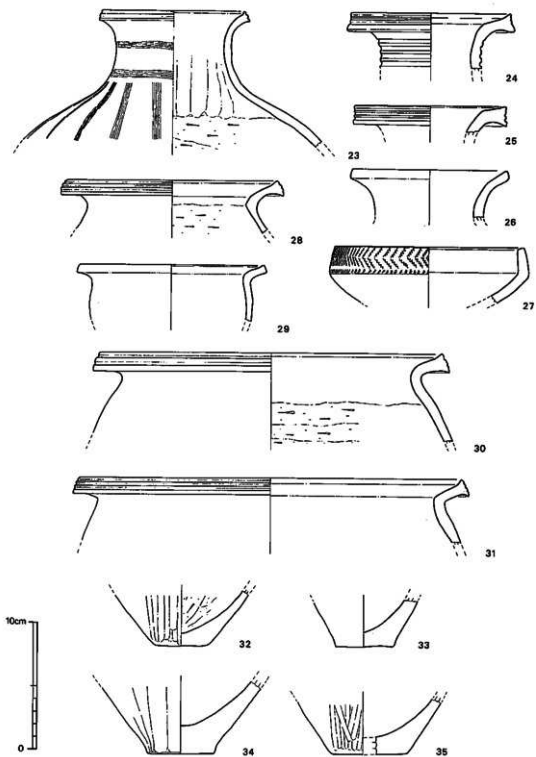
石鏃 4は、横長の剥片を素材とする比較的大形の平基式の石鏃である。調整は全体的に大きめに施されており、基部付近の細部調整(仕上げ痕)はほとんど認められない。長さ3.4cm, 幅1.7cm, 厚さ0.6cmを測る。安山岩製。SB10出土。



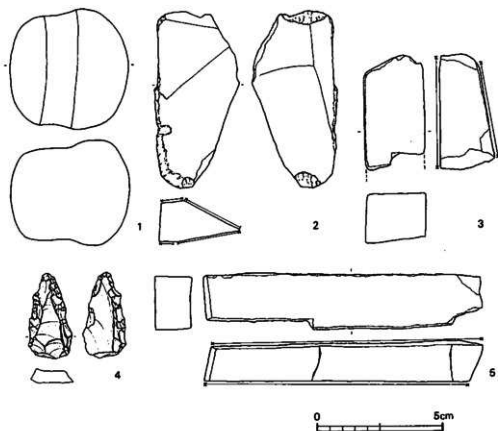
第10圖 SB01、04、10出土土器実測圖



第11图 SK02、07出土土器实测图



第12图 土器集中部出土土器实例图



第13図 SB01、10出土石器実測図

A地点出土弥生土器観察表

No.	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
SB01 1	甕	口径 26.7	口頸部は外方に強く屈曲し、端部は上方にやや拡張する。	口頸部は内外面共に横ナデ。	胎土：1~2mm程度の石英粒を多く含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：不良。
2	底部	底径 3.5	上底。	内外面共にナデ。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：黒褐色。 焼成：不良。
SB04 3	甕		口頸部を外方に強く屈曲する。	内外面共に横ナデ。	胎土：2mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：不良。

No.	器種	流量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
4	底部	底径 5.9	凹み底。	内面はヘラ削り。外面はナデ。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
5	底部	底径 1.9	平底。	調整不明。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：淡灰褐色。 焼成：不良。
6	底部	底径 5	平底。	内外面共にナデ。	胎土：細かな砂粒を多量に含む。 色調：淡褐色。 焼成：良好。
7	底部	底径 5.1	凹み底。	調整不明。	胎土：3mm程度の石英粒を含む。 色調：淡黄白色を呈す。 焼成：不良。
8	底部	底径 5	平底。	外面は縦方向のヘラ磨き。内面はヘラ削り。	胎土：2～3mm大の石英・長石・雲母粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
SB10 9	壺	口径 16.1	口頸部はラッパ状に開き口縁端部を上下両方に拡張する。	内外面共に横ナデ。口縁端部には凹線文が2条めぐる。	胎土：1～3mm程度の砂粒を含む。 色調：暗赤褐色。 焼成：不良。
10	壺	口径 14.8	口頸部はラッパ状に開き口縁部を肥厚させる。	内外面共に横ナデ。口縁端部には凹線文が2条めぐる。	胎土：細かな砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
11	甕	口径 19.5	口頸部は外反し口縁部を上下に拡張しているが下方が著しい。胴部はやや張る。	口頸部は内外面共に横ナデ。胴部外面はナデ。口縁端部には凹線文が2条めぐる。	胎土：1～3mm程度の石英粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。 外面に炭化物付着。
12	甕	口径 16.3	口頸部は短く外反し口縁端部を上下両方に拡張するが下方が特に著しい。頸部と胴部の境付近には稜が付く。	口頸部は横ナデ。胴部外面はナデ。内面は指頭圧瓦。口縁端部には凹線文が2条。胴部は列点文が施される。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：淡褐色。 焼成：良好。
13	鉢	口径 13.9 現高 6.9	体部は外反し口縁部は内湾気味に上方は延び肥厚させる底部は尖り気味の丸底。	外面は板状工具の小口を用いた板ナデ。内面はナデ。	胎土：1～4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：暗茶褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。

No	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
14	高杯	口径 14.3	杯底部は外方に延び口縁部は内反気味に立上がる。	口縁部外面は横ナデ。杯底部は指頭圧痕が残る。口縁部には4条の沈線文をめぐらす。	胎土：1mm程度の石英粒を含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：良好。
15	底部	底径 6.1	凹み底。	外面は縦方向のヘラ磨き。底面はナデ。底部付近の器壁は著しく肥厚する。	胎土：3～4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡赤褐色。 焼成：不良。
16	底部	底径 8.7	凹み底。	外面はヘラナデ。下位および内面はナデ。	胎土：3～4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：良好。
17	底部	底径 3.1	平底。	内面はヘラ削り。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡灰褐色。 焼成：不良。
18	手捏器土	口径 8.2 現高 5	口頸部は強く外反し端部は丸くおさめる。胴部はラッパ状に開き底部は尖気味の丸底。	内外面共に指頭圧痕が著しく残る。外面および口頸部にはナデ。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：暗黒褐色。 焼成：良好。
SK02 19	甕	口径 29.5 底径 6.1 推定高 29.5	口頸部は外反し口縁端部を下上両方に拡張する。胴部は肩が狭り頸部との境界付近に隆帯を付する。凹み底。	口頸部は横ナデ。下手は外面縦方向のヘラ磨き。内面ナデ。底部内面には指頭圧痕を残す。口縁端部に2条の凹線文・隆帯上には刻目が施される。肩部には二枚貝腹縁による刺突が3段みられる。内面には粘土紐貼付け痕が残る。	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を多量に含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。 外面に炭化物付着。
20	鉢	口径 17.3 推定高 11	碗状を呈する。口縁部は内湾気味に上方に延びる。尖底。	内外面共にナデ。器壁は著しく厚い。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：暗褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
21	底部	底径 7.8	平底。	内外面共に調整不明。	胎土：1～4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：暗褐色～淡黄褐色。 焼成：不良。
SK07 22	高杯	口径 17.2 脚柱径 5.7	杯底部は外方に延びやや外湾気味の口縁部を付ける。脚柱部は円筒状に下方に延びる。	口縁部は横ナデ。口縁部下位はヘラ状工具による列点文。脚柱部は沈線文を施す。杯底部は円板充填法をとる。	胎土：1～4mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄白色。 焼成：不良。

No.	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土器 集中部 23	壺	口径 11.3 現高 10.8	頸部は上方に立上がり口縁部は外反し上下両方にやや拡張する。肩部は著しく張る。	口縁部は横ナデ。外面はナデ。内面は頸部が縦方向のナデ。胴部内面は横方向のヘラ削り。口縁部は2条の凹線文。頸部は櫛歯状工具による条線を2条、胴部には垂下する条線を20条施す。	胎土：1～3mm程度の石英・長石・雲母粒を含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：良好。
24	壺	口径 12.6	頸部は上方に延び口縁部は強く外反し端部を上下方向に拡張するが特に下方が著しい。	口縁部および頸部外面は横ナデ。頸部内面にはナデ。口縁部は3条の凹線文。頸部には4条以上の凹線文を施す。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
25	壺	口径 11.9	口縁部が強く外反し端部は上下両方に拡張する。頸部は下方に延びる。	内外面共に横ナデ。口縁部端面には3条の凹線文をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：良好。
26	壺	口径 12.3	口縁部がラッパ状に開き頸部は斜下方に延びる。	内外面共に横ナデ。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
27	高杯	口径 14.9	杯底部は内湾気味に外方に開き口縁部は内反する。	口縁部は内外面共横ナデ。杯底部はナデ。口縁部は二枚貝腹縁による綾杉刺突文と刺突文を施す。	胎土：1～3mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
28	甕	口径 16.6	口頸部は外湾気味に外反し口縁端部を肥厚させている。肩部はやや張る。	口頸部は内外面共横ナデ。胴部内面は横方向のヘラ削り。口縁端面は3条の凹線文がめぐる。	胎土：2mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：不良。
29	甕	口径 14.5	口頸部は外湾気味に外反させ口縁端部を若干上方に拡張する。	口頸部は内外面共に横ナデ。	胎土：1～3mm程度の石英粒を含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：不良。
30	甕	口径 27.1	口頸部は強く外反し口縁端部は上下両方に拡張する。肩部はやや張る。	口頸部内外面共に横ナデ。胴部外面はナデ。内面は横方向のヘラ削り。口縁端面には凹線文2条がめぐる。	胎土：3～4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
31	甕	口径 30.2	口頸部は強く外反し口縁端部は上下両方に拡張する。肩部は張る。	口頸部は内外面共に横ナデ。口縁端面には3条の凹線文をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。 外面に炭化物付着。
32	底部	底径 4.1	平底。	外面は縦方向のヘラ削き。内面はヘラ削り。	胎土：細かい石英・長石・雲母を含む。 色調：淡赤褐色。 焼成：不良。

No.	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
33	底部	底径 4.6	凹み底。	調整は不明。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：暗灰褐色。 焼成：不良。
34	底部	底径 5.1	平底。	外面はヘラナデ。内面はナデ。器壁は著しく厚い。	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：黄褐色。 焼成：良好。
35	底部	底径 6	平底。	外面は縦方向のヘラ磨き。内面はナデ。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡茶褐色。 焼成：良好。

V 奥田大池遺跡B地点

a. 検出遺構

調査の結果、当地点で検出された遺構は、弥生時代中期末から後期初頭にかけての竪穴住居跡（SB01～03）3軒のみで、南から北にのびる丘陵の東側斜面にそれぞれ造営されていた。なお、丘陵上あるいは西側の斜面には住居跡などの遺構は存在しなかった。竪穴住居跡の遺存状態は、斜面に営まれていたため東側部分が流失しきわめて悪かった。また、調査区の南に続く東側斜面には弥生土器片が多数散布しており、そこにも住居跡の存在が想定できる。

SB01（第15図）

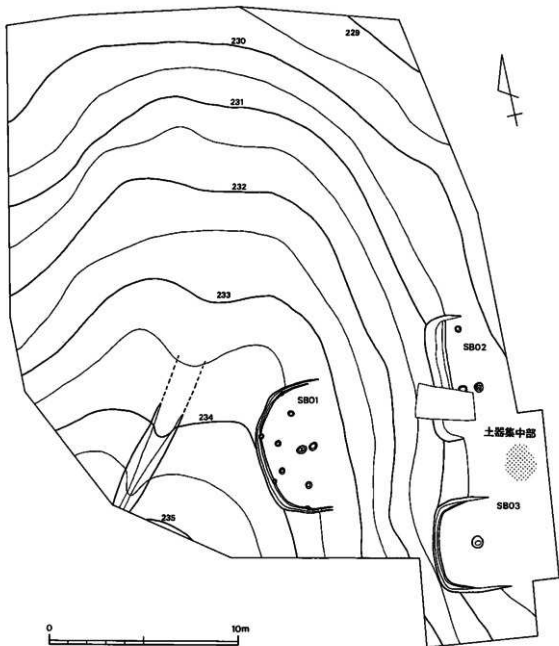
SB01は、丘陵頂上部よりやや下った東側斜面に営まれていた。東側部分が流失しているため規模などの詳細は不明であるが、床面の長径6.35mを測り、楕円形を呈する竪穴住居であったと想定できる。支柱穴と考えられるものは、P1、P3、P5、P7といった径約40cm前後の各ビットで、その各々支柱穴に対応する比較的小形で浅いビット群—P2、P4、P6、P8—が壁溝にやや入込んだところにある。各々の支柱穴との関係は、〈P1⇔P2〉、〈P3⇔P4〉、〈P5⇔P6〉、〈P7⇔P9〉である。各ビット間の距離は、P1—P3は1.7m、P3—P5は1.4m、P5—P7は1.6mである。また、壁溝にかかるところにある各ビット間の距離は、P2—P4は2.45m、P4—P6は2.45m、P6—P8は2.3mで、ほぼ同様な間隔である。さらに、P2からP4にかけての壁溝近くに径20cm前後の浅い小ビット群—P11、P12、P13、P14—が存在している。住居跡の中央より東に寄ったところに径40×55cm程度の小ビット—P10—があり、その埋土には黒褐色土がみられた。壁高は西側の高いところで62cmを測る。壁溝は、幅5～16cm、深さ5～7cmをそれぞれ測り、全周に及ぶかどうかは不明である。住居跡の埋土は暗褐色土、赤褐色土である。遺物は少量で壁溝中に認められた。

SB02（第16図）

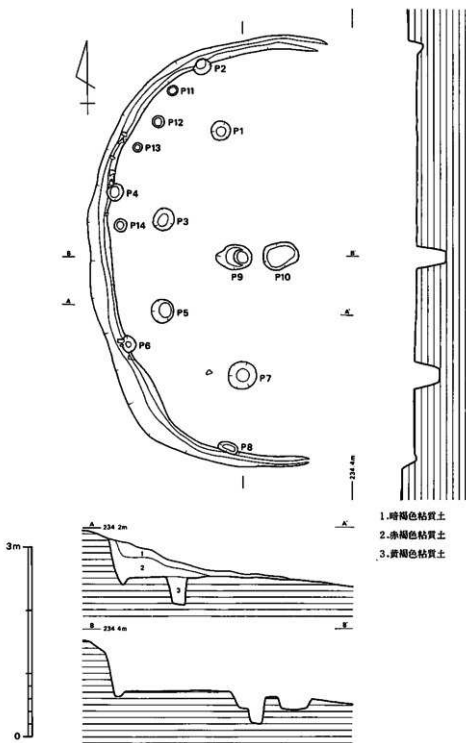
SB02は、SB01の東約7mの斜面の下方に営まれていた。SB01との標高差は約4.5m程度で、SB03とは同様なレベルである。東側部分が流失しているため規模などの詳細は不明であるが、床面の南北長径5.75mを測り、隅丸方形を呈する竪穴住居であったと想定できる。支柱穴と考

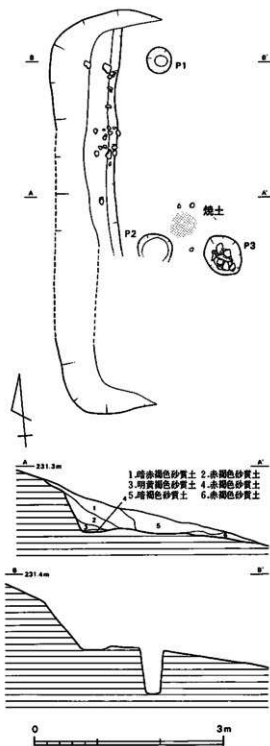


SB02集石



第14図 奥田大池遺跡跡目地点透視配置図





第16図 SB02実測図

えられるものは、住居跡の北側のP1のみであり他は検出できなかった。住居跡の中央部より西に寄ったところに径約55cm程度の比較的浅いビットP2がみられ、そのP2の埋土には暗褐色粘質土がみられた。そしてP2の北東に近接して径約40cm程の焼土が確認された。さらに、P2の東側に数個小礫の詰った径約60cm程度の小ビットP3がみられた。また、住居跡の壁面下部に、壁溝とは呼びにくい溝状の遺構が検出された。南半部分は試掘トレンチのためその遺構の続きは不明であった。住居跡の埋土は暗赤褐色土、赤褐色土、明黄褐色土、暗褐色土であった。遺物は比較的多く主に北半に集中して出土した。

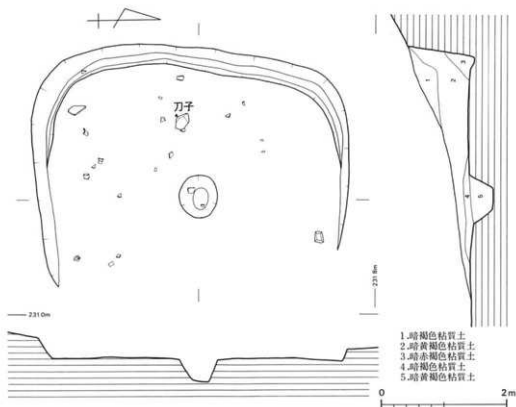
SB03 (第17図)

SB03は、SB02の南約3m、SB01の南東約6mの丘陵斜面の下方に営まれていた。SB01と同様東側部分が流失している。床面の南北長径4.6mを測り、隅丸方形を呈する堅穴住居であったと想定できる。柱穴は検出されず、住居跡の中央部に径60×68cm、深さ約35cm程のビットが存在しているにすぎない。その埋土には暗黄褐色粘質土がみられた。壁高は南西側の高いところで112cmを測る。また、壁溝は西側の辺から南側、北側の辺に若干かかるぐらいで途

中で消失し全周には及ばない。壁溝の幅5～12cm、深さ6～8.5cmをそれぞれ測る。住居跡の埋土は暗褐色土、暗黄褐色土、暗赤褐色土である。遺物はSB01に比べ若干多いくらいである。



SB02土器出土状況

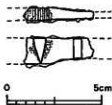


第17図 SB03実測図

b. 出土遺物

土器（第19, 20, 21, 22, 23図）

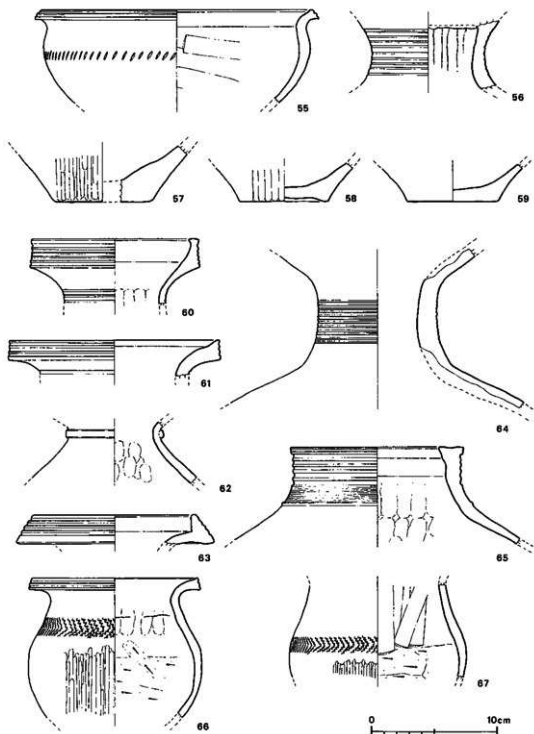
当地点で出土した土器は、A地点と同様弥生時代中期末から後期初頭にかけての所産と考えられる。各々住居跡から出土した土器は、比較的少量で細片が目立った。SB01は鉢形土器、SB02は壺・甕・高杯形土器のセットをなし、SB03は壺・甕・高杯形土器のセット、そして碗形土器がそれぞれ出土した。さらに、SB02の南約4m、SB03の北約4mの斜面下部の平坦面に多量の土器片が、上部から転落した状態で集中して認められた。その土器群は、比較的遺存状態が良好で完形になるものも存在している。このことは短期間に埋没したことによって遺存状態が良好であったと考えられよう。器種は壺・甕・高杯・碗形土器がセット関係をなしている。詳細は別表のとおりである。



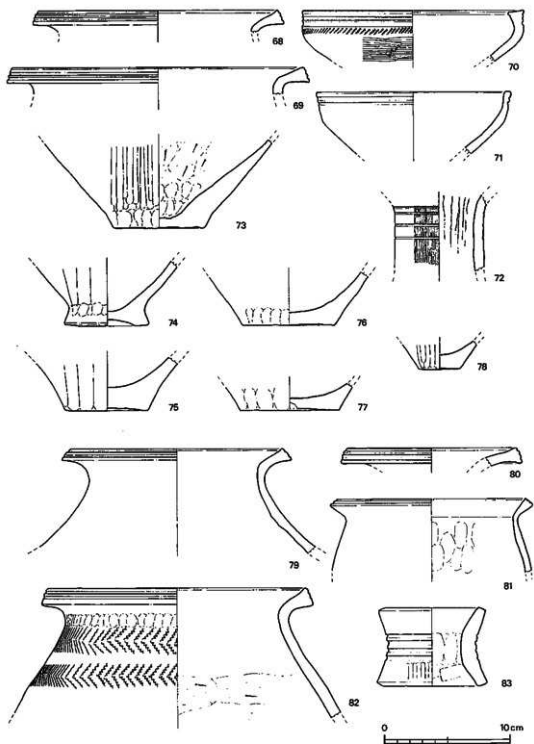
第18図 SB03出土鉄器
実測図

鉄器（第18図）

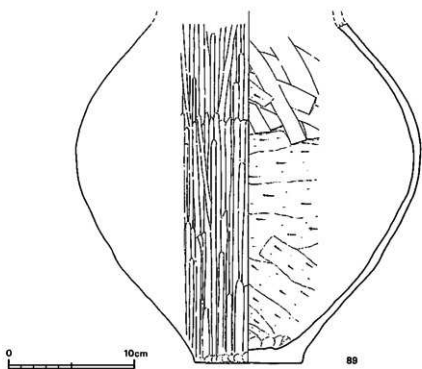
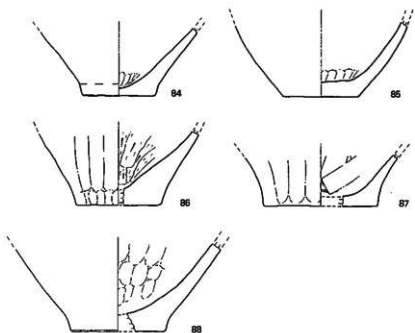
刀子 関部が斜めになる片関の刀子である。刃部と茎がそれぞれ破損している。刃部の断面は二等辺三角形、茎の断面は長方形を呈する。また、関部に寄った部分に木質をとどめる。現存長3.7cm、幅1.4cm、厚さ0.7cmを測る。SB03出土。



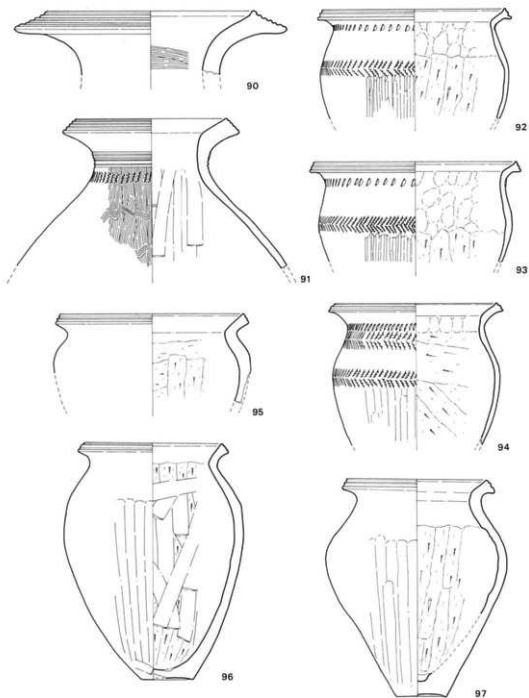
第19图 SB01、02出土土器实测图



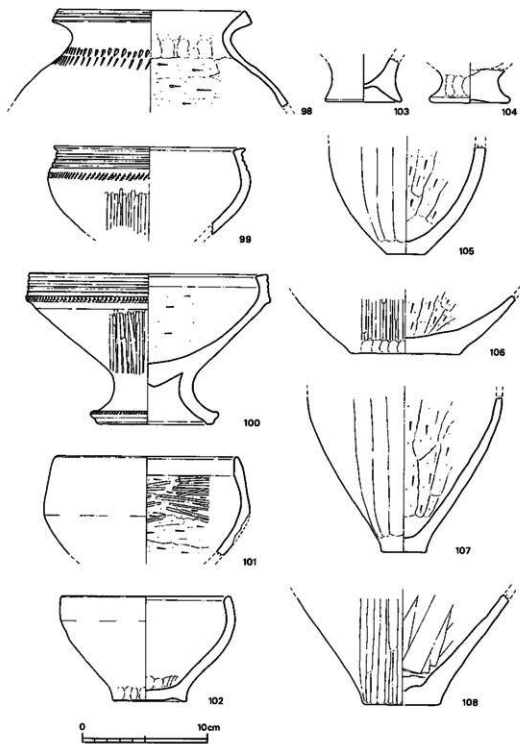
第20图 SB02、03出土土器实例剖面



第21圖 SB03、土器集中部出土土器実測圖



第22圖 土器集中部出土土器実測圖



第23圖 土器集中部出土土器実測図

日地点出土弥生土器観察表

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
SB01 55	鉢	口径 21.4 現高 7.5	口頸部は外押し口縁端部を上下両方向に拡張する。肩部はやや張り胴部下位は著しくすぼむ。	口頸部は横ナデ。胴部内面は縦ナデ。口縁端部には凹線文が2条めぐる。胴部はヘラ状工具による列点文が施される。	胎土：1~2mm程度の砂粒を多量に含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
56	脚部	脚径 9	ラップ状に開く脚柱部である。	外面はナデ。内面にはしぼり目がみられる。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
57	底部	底径 7.4	平底。	外面は縦方向のヘラ磨き。他は不明。器壁は著しく厚い。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：不良。
58	底部	底径 7.1	凹み底。	外面は縦方向のヘラ磨き。内面はナデ。	胎土：2~4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡褐色。 焼成：良好。
59	底部	底径 7.2	平底。	内外面共に調整不明。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
SB02 60	壺	口径 13.1	頸部はラップ状に開き口縁部は肥厚して上方に立上がる。頸部は下方に延びる。	口縁部は横ナデ。頸部外面はナデ。内面には指頭圧痕を残す。口縁部は5条の凹線文、頸部には3条の沈線文をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。
61	壺	口径 16.6	口頸部はラップ状に開き口縁端部を若干上方に拡張する。	口頸部は内外面共に横ナデ。口縁端部には凹線文を3条、頸部は1条以上施す。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
62	壺		肩部は斜下方に延びやや張る。頸部は斜上方に延びる。胴部と頸部の境界付近に隆帯を1条施す。	頸部内面はナデ。胴部は指頭圧痕を残す。隆帯は粘土紐の貼付けによる。	胎土：1~3mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
63	壺	口径 12.9	頸部は著しく外押し肥厚した断面三角形を呈する口縁部を付ける。	口頸部内外面共に横ナデ。口縁部は凹線文を4条めぐらす。	胎土：1~3mm程度の砂粒を含む。 色調：黄褐色。 焼成：良好。
64	壺	頸径 9.4	頸部は円筒状を呈し上方が大きく外反する。肩は下方に延び強く張る。	頸部に沈線文を12条めぐらす。器壁は著しく厚い。	胎土：2~3mm程度の石英粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：不良。
65	壺	口径 13.7 現高 7.7	口頸部は著しく肥厚し内傾気味に上方に延び	口頸部は横ナデ。頸部内面下部は縦方向のナデ。	胎土：1~2mm程度の石英・長石粒を含む。

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
			る。肩部は強く張る。頸部と胴部の境付近には隆帯を1条施す。	胴部内面は指頭瓦痕を残す。口頸部は6条の凹線文をめぐらす。頸部には櫛歯状工具による条線を下方に施す。隆帯は粘土紐の貼付けによる。	色調：淡黄茶褐色 焼成：不良。
66	甕	口径 13.1 現高 11.1 最大径 13.7	口頸部は外湾気味に外反し口縁端部を若干肥厚させる。胴部は球体状を呈しよく張る。	口頸部は内外面共に横ナデ。肩部はナデ。胴部下半には縦方向のヘラ磨き。内面下半はヘラ削り。口縁端面は2条の凹線文。肩部には二枚貝腹縁による波状刺突文を施す。	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
67	甕	最大径 14	胴部は球体状によく張り頸部は外反する。	胴部上半外面はナデ。内面は板ナデ。胴部下半外面は縦方向のヘラ磨き。内面は横方向のヘラ削り。最大径付近には二枚貝腹縁による波状刺突文を施す。	胎土：1mm程度の砂粒を多量を含む。 色調：暗茶褐色～黒褐色。 焼成：良好。
68	甕	口径 18.8	口頸部は外湾気味に外反し口縁端部を肥厚させる。	口頸部内外面共に横ナデ。口縁端面には3条の凹線文をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
69	甕	口径 23.1	口頸部は強く外反し口縁端部を肥厚させる。	口頸部内外面共に横ナデ。口縁端面には2条の凹線文をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：黄褐色。 焼成：不良。
70	高杯	口径 17.4	体部は外方に延び口縁部を強く上方に曲げ端部を若干肥厚させる。また口唇部は内傾する。	口縁部は横ナデ。体部外面は横方向のヘラ磨き。内面はナデ。口縁部は3条の凹線文をめぐらせその下位には二枚貝腹縁による刺突文を施す。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：黒褐色。 焼成：良好。
71	高杯	口径 15.3	体部は外方に延び口縁部は屈曲させ内湾気味に外反する。	口縁部は横ナデ。体部は内外面共にナデ。口縁部は沈線文を2条めぐらす。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：黄褐色。 焼成：良好。
72	高杯	脚径 7	円筒状を呈する脚柱部。	外面は縦方向のハケ目。内面にはしぼり目がみられる。上位には4条の沈線文がめぐらされる。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
73	底部	底径 7	底面が若干凸凹を呈する平底。	外面は縦方向のヘラ磨き。下位は内外面共に指頭瓦痕を残す。内面はヘラ削り。	胎土：2～3mm程度の石英粒を含む。 色調：暗黄褐色～黒褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
74	底部	底径 6.5	高台状の凹み底。	外面はヘラナデ。内面および底面はナデ。外面下位には指頭圧痕が残る。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：内・暗茶褐色。 外・黒褐色。 焼成：良好。
75	底部	底径 6.5	凹み底。	外面はヘラナデ。内面および底面はナデ。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：内・暗茶褐色。 外・淡赤褐色。 焼成：良好。
76	底部	底径 7.2	凹み底。	内外面共に調整不明。外面下位に指頭圧痕を残す。底面には丹が塗着。	胎土：1～5mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
77	底部	底径 7.8	凹み底。	底面はナデ。外面に指頭圧痕を残す。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：内・黒褐色。 外・淡黄褐色。 焼成：不良。
78	底部	底径 3.2	凹み底。	外面は縦方向のヘラ磨き。内面および底面はナデ。	胎土：1～5mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
S B 03 79	壺	口径 16.7	口頸部は強く外反し口縁端部を肥厚させる。肩部は斜下方に延びやや張る。	調整不明。口縁端面には2条の凹線文をめぐらす。	胎土：1～4mm程度の砂粒を多量に含む。 色調：淡黄色。 焼成：不良。
80	壺	口径 13.3	口頸部がラッパ状に開き口縁端部を肥厚させる。	内外面共に横ナデ。口縁端面は3条の凹線文をめぐらす。	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：不良。
81	甕	口径 14.9	口頸部は外反し上方に開き肥厚させる。胴部は肩が若干張る。	口頸部は横ナデ。胴部外面はナデ。内面には指頭圧痕が残る。口縁端面は2条の凹線文をめぐらす。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
82	甕	口径 20.2 現高 10.3	口頸部は内湾気味に外反し口縁端部を肥厚させる。胴部は斜下方に延び肩が若干張る。	口頸部は横ナデ。胴部外面および内面上半にはナデ。また外面胴部と頸部の境界付近には指頭圧痕が残る。胴部内面下半は横方向のヘラ削り。口縁端面は2条の凹線文をめぐらす。胴部上半には二	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を多量に含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
				枚貝腹縁による幾何形状の刺突文を2段施す。	
83	器台	口径 7.5 脚径 7.2	鼓状を呈する小形のものである。	口縁部は横ナデ。体部外面はナデ。脚部外面は縦方向のヘラ磨き。内面は板ナデ。また体部内面には指頭圧痕を残す。体部は沈線文を4条めぐらす。	胎土：細かい砂粒を含む。色調：暗褐色。焼成：良好。
84	底部	底径 5.6	平底。	内面および底面はナデ。内底面には指頭圧痕が残る。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。色調：暗黄褐色。焼成：不良。
85	底部	底径 4.9	平底。胴部は内湾気味に外反し上方に延びる。	内外面共にナデ。内底面には指頭圧痕が残る。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。色調：淡赤褐色。焼成：良好。
86	底部	底径 6.5	平底。	面外はヘラナデ。内面はヘラ削り。外面下位には指頭圧痕を残す。器壁は著しく厚い。	胎土：1~4mm程度の砂粒を含む。色調：内・黒褐色。外・暗黄灰色。焼成：良好。
87	底部	底径 9	平底。	外面はヘラナデ。内面はヘラ削り。外面下位には指頭圧痕を残す。器壁は著しく厚い。	胎土：1~2mm程度の石英粒を含む。色調：暗褐色。焼成：良好。
88	底部	底径 7.4	平底。	外面はナデ。内面は指頭圧痕が残る。	胎土：細かい砂粒を含む。色調：暗茶褐色。焼成：良好。
土器 集中部 89	壺	底径 8.4 現高 26.8	胴部は球体状によく張り底面は平底。	外面は縦方向のヘラ磨き。下位に指頭圧痕を残す。内面はヘラ削りののち上位を板ナデ。内底面に指頭圧痕がみられる。	胎土：1~3mm程度の石英・長石粒を含む。色調：淡黄褐色。焼成：良好。
90	壺	口径 16.4	口頸部はラップ状に開き口縁端部を肥厚させる。	口頸部は横ナデ。頸部内面下位はハケ目。口縁部に6条の凹線文がめぐる。器壁は著しく厚い。	胎土：1mm程度の石英・長石粒を含む。色調：暗黄褐色。焼成：良好。
91	壺	口径 11.9 現高 11.9	頸部はよく締まり口縁部を肥厚させラップ状に開き胴部は肩が斜下方に延び若干張る。	口頸部は横ナデ。胴部外面は縦方向のハケ目。内面は板ナデ。口縁部は4条の凹線文。頸部には梯歯状工具による直線文。	胎土：1~2mm程度の石英・長石・雲母粒を含む。色調：暗黄褐色。焼成：良好。

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
				胴部には波状文を2段施す。また頸部と胴部の境界付近には二枚貝腹縁による刺突文がみられる。	
92	甕	口径 14.5 最大径 14.9 現高 8.8	口頸部は強く外反し口縁端部を上下両方向に拡張する。胴部は球体状を呈しよく要る。	口縁部は横ナデ。胴部上半は外面がナデ。内面は指頭圧痕が残る。胴部下半外面は縦方向のヘラ磨き。内面はヘラ削り。口縁端面は2条の凹線文。頸部に列点文。胴部最大径付近には二枚貝腹縁による縞杉状刺突文が施される。	胎土：1mm程度の砂粒を多量に含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
93	甕	口径 15.9 最大径 15.2 現高 7.9	口頸部は外湾気味に強く外反し口縁端部は上下両方向に拡張する。内面には皺を有す。胴部は若干要る。	口頸部は横ナデ。胴部上半外面がナデ。内面は指頭圧痕を残す。下半は外面が縦方向のヘラ磨き。内面はヘラ削り。口縁端面は2条の凹線文。頸部は列点文を施す。胴部最大径付近には二枚貝腹縁による縞杉状刺突文をめぐらす。	胎土：1～2mm程度の石英・長石・雲母粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
94	甕	口径 12.7 最大径 13.2 現高 11.2	口頸部は外湾気味に外反し口縁端部は上下両方向に拡張する。胴部は倒卵形を呈しよく要る。	口頸部は横ナデ。頸部内面下位には指頭圧痕が残る。胴部上半はナデ。下半は縦方向のヘラ磨き。内面はヘラ削り。口縁端面は2条の凹線文。頸部は列点文、胴部には二枚貝腹縁による縞杉状刺突文が2段施される。	胎土：1～2mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：暗黄灰色。 焼成：良好。 内面に炭化物付着。
95	甕	口径 14.4 最大径 15.5	口頸部を強く外反させ口縁端部を上方に若干拡張する。肩部はよく要る。	口頸部は内外面共に横ナデ。胴部は外面がナデ。内面はヘラ削り。口縁端面は2条の凹線文をめぐらす。器壁は著しく厚い。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
96	甕	口径 11.9 最大径 14.3 底径 4.1 器高 18.6	口頸部は外湾気味に強く外反させ口縁端部を上下両方向に拡張している。胴部は倒卵形を呈しよく要る。底部は若干凹み底。	口頸部は内外面共に横ナデ。胴部はヘラナデ。内面はヘラ削りののち板ナデ。口縁端面は2条の凹線文がめぐる。器壁は若干厚い。	胎土：1～2mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：暗黄灰色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
97	甕	口径 11.1 最大径 14.4 底径 4 器高 17	口頸部は強く外反し口縁端部を上下両方向に拡張する。胴部は著しく張り底部は凹み底。	口頸部は横ナゲ。頸部内面下位はナゲ。胴部外面は縦方向のヘラナゲ。内面にはヘラ削り。口縁端面には2条の凹線文をめぐらす。	胎土：1～4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：暗黄白色。 焼成：良好。 外面に炭化物含む。
98	甕	口径 14.7	口頸部は強く外反し口縁部を肥厚させる。胴部は斜下方に延び肩が張る。	口頸部は横ナゲ。頸部内面には指頭圧痕が残る。胴部外面はナゲ。内面はヘラ削り。口縁端面は3条の凹線文、胴部上にはヘラ状工具による列点文を2段施す。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
99	高杯	口径 15	杯底部は外方に延び口縁部が内湾気味に内傾する碗状を呈す。口縁端部は外方向に拡張する。	口縁部は横ナゲ。体部はナゲ。杯底部は縦方向のヘラ磨き。口縁部には4条の凹線文と二枚貝腹縁による刺突文を施す。	胎土：1～4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：黄褐色。 焼成：不良。
100	高杯	口径 18.8 底径 9 器高 11.9	杯底部は斜外方向に延び口縁部は内湾気味に内傾する。高杯に対して脚高は著しく短く脚端部を上下両方向に拡張する。	口縁部は横ナゲ。杯底部は縦方向のヘラ磨き。脚部はナゲ。脚端部は横ナゲ。杯内部はナゲ調整が強いいため砂粒の一部が移動する。口縁部は4条の凹線文と二枚貝腹縁による刺突文、脚端部は1条の凹線文と刺突文をめぐらす。杯底部の接合は円板充填法をとる。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
101	碗	口径 14.4	体部は斜方向に延び口縁部は内傾する。口縁端部は丸くおさめており内面に軽い稜線を有す。	口縁部は横ナゲ。体部外面はナゲ。内面はヘラ削りののち荒いヘラ磨き。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
102	碗	口径 13.3 底径 5.8 器高 8.2	体部は斜上方に延び口縁部は内湾する。口縁端部は丸くおさめる。底部は凹み底。	口縁部は横ナゲ。体部および底面はナゲ。底部および内底面には指頭圧痕を残す。	胎土：1～3mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
103	底部	底径 5.8	高台状の上底。端部は丸くおさめる。	全てナゲ。底面は器壁が著しく薄い。	胎土：1～3mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。
104	底部	底径 6.1	凹み底。端部は丸くおさめる。	外面には指頭圧痕を残す。器壁は2.5cmと著しく厚い。底面はナゲ。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：淡黄褐色。 焼成：良好。

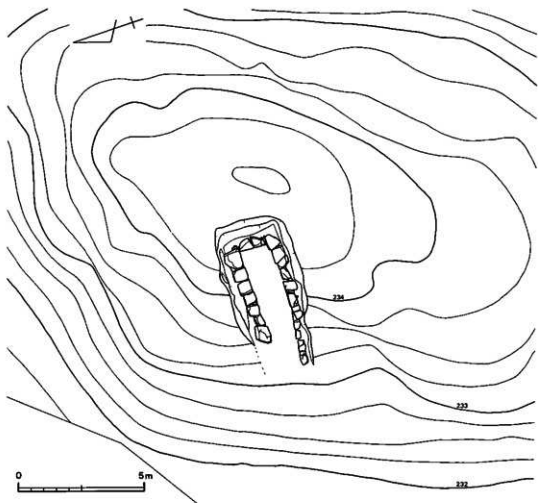
No.	器形	法量(m)	形態の特徴	技法の特徴	備考
105	底部	底径 3	平底。	外面はヘラナデ。下位はナデ。内面はヘラ削り。	胎土：1～3mm程度の石英・長石・雲母粒を含む。 色調：暗黄褐色～黒褐色。 焼成：良好。
106	底部	底径 8.6	平底。	外面は縦方向のヘラ磨き。下位は指頭圧痕を残す。内面はヘラ削り。	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：暗黄褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
107	底部	底径 3.4	胴部はよく張り底部は平底。	外面はヘラナデ。下位は内外面共にナデ。内面はヘラ削り。	胎土：1～4mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：暗黄白色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。
108	底部	底径 6	平底。	外面は縦方向のヘラ磨き。内面は板ナデ。内底面はナデ。	胎土：細かい砂粒を含む。 色調：暗黒褐色。 焼成：良好。 外面に炭化物付着。

Ⅵ 奥田大池古墳 (ST03)

ST03は、丘陵の中央部近くの東から西に比較的ゆるやかに傾斜する場所に構築されていた。調査前は、封土がかなり流失し、周囲の地形と同様であったため古墳とは識別できない状況であった。しかし、試掘調査のトレンチにより石室の一部が現われ、横穴式石室を内部主体にもつ古墳であることが判明した。

a. 墳丘 (第24図)

墳丘は、前に述べたとおり封土が流失してしまっているため明らかにするのは困難であった。しかし、石室を覆う程度の封土が存在していたものと想定できる。また、古墳に伴うと考えられる周溝あるいは、背面をカットするといった地山整形なども不明であった。



第24図 ST03遺存図

b. 石室（第25図）

石室の遺存状況は不良で天井石、南北両側壁は崩落し、北側壁の腰石も一部抜き取られていた。

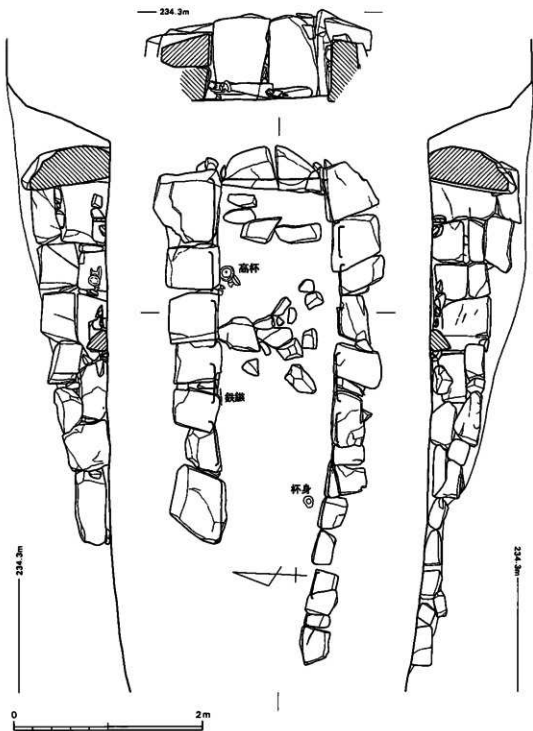
石室の形態は、南側側壁が胴の張る長方形を呈する無袖式の横穴式石室と考えられる。石室の主軸方向は、N-87°-Eをとりほぼ西に開口している。現存長5.46m、奥壁幅1.05m、側壁最大幅1.4m、現存奥壁高0.9mをそれぞれ測る。

壁面の構成をみると、奥壁は表面がなめらかな大きい割石を2石使用し腰石としている。この腰石は石室内に約10°の角度で傾斜している。そして、その2石の腰石が上部で尖頭状となっているため、小石を詰め上端を整え、さらにその上に割石を積んだことが推定できる。現存しているのは腰石の上部南端の小石のみである。北側側壁は、現存している腰石が6枚のみであった。腰石は約40~70cm程度の割石を使用し、直線上に並んでいるが奥壁より5、6枚目の腰石はやや内に入り込んでいる。奥壁より1枚目と5枚目の腰石は、広口積みが採用されている。2段目は割石を横積みし、腰石と同様な大きさの割石あるいはそれ以下の割石を積み込んでいる。横目地は、5枚目の腰石が広口積みであるため2段目の割石の2~4枚目までは水平方向に通っているが、それより先はない。また、1段目の腰石と比べ2段目は、石室側にせり出している。現存しているのは2段までである。南側側壁の現存している腰石は12枚であり、約30~70cm程度の割石が使用されている。北側側壁が直線的になるのに対し、南側側壁は胴張りとなっている。奥壁より1枚目と4枚目の腰石は、広口積みが採用されているため、高さが2段目の割石上端まで達している。また、奥壁より8枚目の腰石から約30cm程度の比較的小形の割石を使用しており内側に入り込んでいる。2段目は、1段目と同様な割石を用いて水平方向に横目地が通るように横積みを採用し、4枚目の広口積みの腰石の上端の高さに整えているようである。南側壁面も北側壁面と同様に石室内にせり出している。現存するのは、3段目の割石のごく一部である。

石室床面は、天井石、南北両壁が崩落し散乱していたため、棺台石と考えられるものの検討は困難であった。床面は、南から北にかけてやや傾斜しており、石室の基底面との差は約10cm程度である。

遺物は、奥壁より約1mの北側壁面のところで高坏3点、同じく約2.3mのところでは鉄鏝1点、南側壁面近くの奥壁より約3.4mのところでは坏身1点がそれぞれ出土している。また、石室内で浮いた状態で鉄鏝2点が出土している。さらに、前庭部でかき出された状態で、耳環、須臾器（杯蓋、杯身、壺、甕、碗、提瓶）など出土した。

石室の掘方については、石室の石を完全に取除けなかつたため腰石の基底面に関して詳しく観察できなかった。奥壁部の掘方は、約70°の角度で掘込まれており、深さは約1.1mを測る。南側壁部の掘方は、1段掘りになっており、北側壁部は腰石の5枚目まではテラス状になる2段掘りになっている。6枚目の腰石からは、後世の前平を受けていて掘方は残っていない。



第25图 ST03石室平面图

c. 出土遺物

須恵器 (第27, 28図)

前述のとおり石室内より高杯、杯身、前庭部よりかき出された状態で杯蓋、杯身、壺、甕、提瓶、椀がそれぞれ出土した。詳細は別表のとおりである。

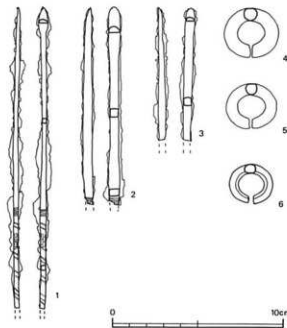
鉄鏃 (第26図 1, 2, 3)

すべて長い筧被のつく細身の長頸鏃である。1は、基部先端を欠損し片九造棘筧被鑿筋式に属する鉄鏃である。鏡頭形の鏃身部に長い筧被が付き、筧被と基部との境には棘状尖起をもつ。基部には、縦方向の筧竹の木質とそれを巻き締めた植物繊維がラセン状に巻きついている。現



ST03須恵器出土状況

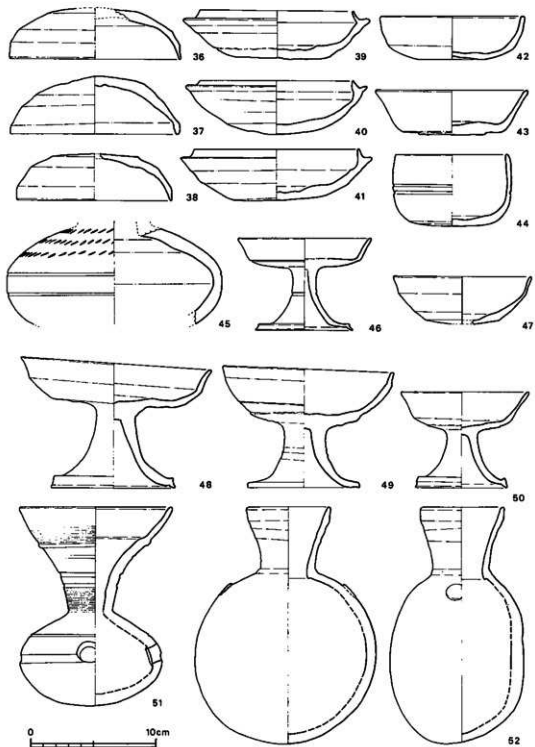
存長17.6cm、刃部長1.4cm、刃部幅0.6cmを測る。2は、基部の大半を欠損し、閃無片九造棘筧被鑿筋式に属する鉄鏃である。鏃身部と筧被の境は明瞭ではない。また、筧被と基部との境には錆化して不明瞭であるが棘状尖起をもつ。現存長11.7cm、刃部長2.5cm、刃部幅0.7cmを測る。3は、筧被及び基部を欠損し2と同様の鉄鏃である。現存長7.8cm、刃部長1.6cm、刃部幅0.6cmを測る。



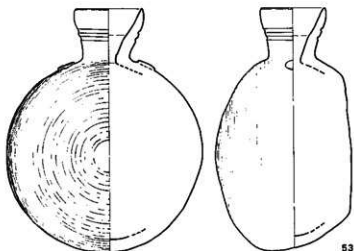
第26図 ST03出土遺物実測図

耳環 (第26図 4, 5, 6)

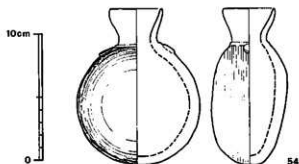
3個体出土したがすべて前庭部でかき出された状態であった。4は、断面楕円形の製品である。遺存状態はきわめて悪く、長径3.2cm、短径2.9cm、断面長径0.8cm、短径0.7cm、重量28gを測る。5も4と同様断面楕円形の製品で遺存状態もきわめて悪い。長径2.9cm、短径2.6cm、断面長径0.7cm、短径0.6cm、重量18gを測る。6も4, 5と同様の形態をとり、遺存状態もきわめて悪いが、内側に金箔を少しとどめている。長径2.5cm、短径2.3cm、断面長径0.7cm、短径0.5cm、重量12gを測る。また、4, 5, 6いずれも銅胎である。



第27圖 ST03出土遺物実測圖



53



54

第28図 ST03出土遺物実測図

ST03出土須恵器観察表

No.	器形	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
36	杯蓋	口 径 13.8	天井部から体部へは緩やかな曲線を描く。口縁部はやや外反気味に開くが体部と明瞭な境界はない。口縁端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・水ビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り。ロクロ回転右方向か？	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：黄灰色。 焼成：あまい。 前庭部出土。
37	杯蓋	口 径 13.2 器 高 4.6	天井部は丸く体部とは明瞭な段を作って境界とする。体部は緩やかな曲線を描き下方に延び先端を肥厚させ口縁部とする。端部は丸く仕上がる。	マキ上げ・水ビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削りを内面には片方向からの仕上げナゲ、ロクロ回転右方向。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：良好・堅緻。 前庭部出土。

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
38	杯蓋	口径 12.4	天井部はほぼ平担で体部とは段により境界とする。体部は緩やかな曲線を描き口縁部に移行する。端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・ホビヤ成形。天井部外面はヘラ切り未調整。ロクロ回転右方向か？	胎土：1～2mm程度の石英・長石粒を含む。色調：淡黄灰色。焼成：あまい。前庭部出土。
39	杯身	口径 12.1 受径 14.9 器高 3.8	底部はほぼ平担で体部とは段線で見える。体部は斜上方に直線的に延ばし受け部は大きく凹み端部は丸く仕上げる。立ち上りは湾曲気味に斜上方に延び端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・ホビヤ成形。底部外面はヘラ切り未調整。内面は不定方向からの仕上げナデ。立ち上りはオリコミ技法か？ロクロ回転右方向。	胎土：2mm程度の石英・長石粒を含む。色調：淡青灰色。焼成：良好・堅緻。前庭部出土。
40	杯身	口径 12.2 受径 14.4 器高 4.3	底部から体部へは外面に緩やかな曲線を描く。受部は幅広の沈線状に凹んでおり端部は丸く仕上げる。立ち上りは斜上方に延び端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・ホビヤ成形。底部外面は回転ヘラ削りののちナデつけ。内面は片方向からの仕上げナデ。立ち上りはオリコミ技法か？ロクロ回転右方向。	胎土：0.5～2mm程度の石英粒を含む。色調：淡青灰色。焼成：良好・堅緻。前庭部出土。
41	杯身	口径 13 受径 15.2 器高 4.1	底部はほぼ平担で体部とは外面の段線で見える。体部は斜上方に直線気味に延ばし受け部は凹み端部は丸く仕上げる。立ち上りは斜上方に延び端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・ホビヤ成形。底部外面は回転ヘラ削り。立ち上りはオリコミ技法か？ロクロ回転左方向。	胎土：細かな砂粒を多量に含む。色調：淡黄灰色。焼成：あまい。前庭部出土。
42	杯身	口径 11.4 器高 3.5	底部は僅かに凹むがほぼ平担で体部とは明瞭な段線で見える。体部は曲線を描き強く内湾し口縁部に移行する。端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・ホビヤ成形。底部外面および体部 1/2位まで不定方向のナデ。ロクロ回転右方向。	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を含む。色調：淡黄灰色。焼成：良好・堅緻。前庭部出土。
43	杯身	口径 12.1 器高 3.6	底部はやや凹むが肥厚し体部との境界は明瞭な段線により界する。体部は斜直線的に延び口縁部に移行する。端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・ホビヤ成形。底部外面はヘラ切り未調整。ロクロ回転右方向。	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を含む。色調：淡黄灰色。焼成：良好・堅緻。石室内出土。
44	碗	口径 8.9 器高 5.7	底部はほぼ平担で強く湾曲し体部に移行する。体部はやや内湾気味に上方に延び端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・ホビヤ成形。底部外面は回転ヘラ削り。内面には片方向からの仕上げナデ。体部中位には2条の沈線をめぐらせる。	胎土：細かな砂粒を多量に含む。色調：暗黄灰色。焼成：良好・堅緻。前庭部出土。

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
45	壺	最大径 17 現高 7.6	楕円状によく張った体部片である。	マキ上げ・水ビキ成形。体部最大径付近に2条の沈線をめぐらせ、肩部にヘラ状工具による列点文を3段施す。	胎土：1mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：あまい。 前庭部出土。
46	高杯	口径 10.5 脚径 7.7 器高 7.4	杯底部は著しく浅く平坦で体部とは沈線で界する。体部は外湾気味に斜上方に延び口縁端部は丸く仕上げる。脚部はラッパ状に開き細い脚端部を斜下方に延ばす。	マキ上げ・水ビキ成形。杯部と脚部はハリツケ技法。杯部および脚部中位にはそれぞれ沈線が1条めぐる。	胎土：細かな砂粒を含む。 色調：灰色。 焼成：良好・堅緻。 杯部内面に黄緑色の自然釉が着着する。 前庭部出土。
47	杯身	口径 10.9 現高 3.8	碗状を呈する杯身である。底部と体部は明瞭な段により界しやや湾曲気味に斜上方に延びる。端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・水ビキ成形。外底面は回転ヘラ削りの不定方向の仕上げナデ。	胎土：細かな砂粒を含む。 色調：灰色。 焼成：良好・堅緻。 内面に黄色の自然釉が着着する。 前庭部出土。
48	高杯	口径 15.1 脚径 9.8 器高 9.9	杯部底面はやや凹凸があるが平坦で底部と体部の境は不明瞭。斜上方に延びる体部から口縁部の移行は緩により界し口縁部は外湾する。端部は丸く仕上げる。脚部はラッパ状に開き端部を若干上下に拡張する。	マキ上げ・水ビキ成形。杯部と脚部はハリツケ。杯部内底面は片方向からの仕上げナデ。ロクロ回転右方向。	胎土：1～5mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：良好・堅緻。 石室内出土。
49	高杯	口径 13.5 脚径 8.8 器高 9.4	杯部底面は僅かに凹むがほぼ平坦で体部とは明瞭な段により界する。体部は斜上方に延び口縁部はやや薄い。脚部はラッパ状に開き脚端内面に凹線を持つ。端部は丸く仕上げる。	マキ上げ・水ビキ成形。杯底部はヘラ切り未調整の上を広くナデる。杯部と脚部はハリツケ。脚部中位には凹線を2条施す。ロクロ回転左方向。	胎土：1～3mm程度の石粒を含む。 色調：黄灰色。 焼成：やや良好・堅緻。 石室内出土。
50	高杯	口径 10.2 脚径 7.4 器高 7.6	杯底部は丸い形態を示し体部とは明瞭な段により界す。体部は斜上方に延び口縁部に移行し端部は丸く仕上げる。脚部はラッパ状に開き端部を上下に拡張する。	マキ上げ・水ビキ成形。杯底部はヘラ切り未調整の上を広くナデる。杯部と脚部はハリツケ。脚端部に凹線を1条施す。	胎土：1～2mm程度の石英粒を含む。 色調：淡青灰色。 焼成：良好・堅緻。 一部に黄色～黄緑色の自然釉が着着。 石室内出土。
51	皿	口径 12.1 最大径 11.3	口縁部は大きくラッパ状に開く。口縁部と頸部の	マキ上げ・水ビキ成形。口縁部下位および頸部下	胎土：1～4mm程度の石英・長石粒を含む。

No.	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
		器高 15.8	移行付近には1条の凸帯、頸部中に2条の凹線を施す。底部は丸底を呈し体部は斜上方に延ばす。底部と体部の移行付近には1条の凹線と孔を穿す。	位にはカキ目。孔は外面→内面に穿す。底部は不定方向のナデ。	色調：灰色。 焼成：良好・堅緻。 前庭部出土。
52	提瓶	口径 6.5 最大径 14.3 器高 18.9	体部は正円状によく張るが側面観は片面が緩やかな曲線を描くのに対し他面は平坦気味となる。上肩部にはボタン状突起が一对付く。頸部は外反し口縁部との移行は明瞭な稜で界す。底部は丸く仕上げ上げる。	マキ上げ・ホビキ成形。体部は片面は粘土門板で塞ぐ。他面は不定方向のナデ。口頸部は体部側面に径5cm前後の孔を穿し付ける。上肩部のボタン状突起は貼付け。	胎土：1～3mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：灰色。 焼成：良好・堅緻。 前庭部出土。
53	提瓶	口径 5.4 最大径 15.5 器高 19.3	体部は正円状に張るが側面観は片面が緩やかな曲線を描くのに対し他面は平坦となる。上肩部にはボタン状突起が一对付く。頸部は外反し口縁部はやや尖り気味。口縁部中に2条の沈線が施される。	マキ上げ・ホビキ成形。体部片面は粘土門板で塞ぎそしてカキ目。他面は回転ヘラ削り。口頸部は体部側面に径4cm前後の孔を穿し付ける。上肩部のボタン状突起は貼付け。	胎土：1～2mm程度の石英・長石粒を含む。 色調：灰色。 焼成：良好・堅緻。 前庭部出土。
54	提瓶	口径 4.2 最大径 9.9 器高 12.3	他の2点に対し著しく小形のものである。体部は正円状に張るが側面観は両面ともに緩やかな曲線を描く。上肩部にはボタン状突起が一对付く。口頸部は外方に開き先端がやや内凹気味となる。	マキ上げ・ホビキ成形。体部は片面を粘土門板で塞ぎ両面とも不定方向のナデ。また片面はその上にカキ目。口頸部は体部側面に径3cm前後の孔を穿し付ける。上肩部のボタン状突起は貼付け。	胎土：細かな砂粒を多量に含む。 色調：灰白色。 一部に白堊が認められる。 焼成：良好・堅緻。 前庭部出土。

註 須恵器の成形・調整手法に関しては、中村浩『和泉陶器窯の研究』1982によった。

弥生式土器の成形・調整手法に関しては、小林行雄・佐原真『香川県三豊郡同町紫雲山弥生式遺跡の研究』詫那町文化財保護委員会1999によった。

なお、板ナデ調整とはハケ目調整同様板状工具を器面に押し付け、なでつけを行うが内面の条線が認められないものである。またヘラナデ調整とはヘラ磨き調整のそれが幅が狭く、往復運動によって施すのに対し、幅広く往復運動をあまり伴わないものである。

Ⅶ ま と め

奥田大池遺跡A・B両地点の発掘調査によって得られたいくつかの成果を述べ、若干の問題点を抽出してまとめにかえたい。

弥生時代の調査の成果は、中期末～後期初頭にかけての竪穴住居跡6軒（A地点3軒、B地点3軒）と、それに同様な時期と推定される袋状竪穴遺構群10基（A地点）の発見である。また、A・B両地点で土器の集中部がみられ、特にB地点では良好な一括の土器群が得られた。土器については、今後稿を改めて述べることにしたい。

竪穴住居跡は、A・B両地点にそれぞれ3軒ずつ検出された。A地点では、隅丸方形を呈し柱穴4本のSB01、隅丸方形を呈し小形で柱穴1本のSB04、楕円形を呈するSB10が検出された。B地点においては、楕円形を呈するSB01、隅丸方形を呈し柱穴1本のSB02、SB02と同様隅丸方形を呈し柱穴のないSB03がそれぞれ検出された。また、B地点の調査区の南に続く丘陵の東側斜面に多数の弥生土器片が散布しており、そこにも住居跡の存在が想定されよう。

住居跡で特に注目されるのは、A地点のSB10、B地点のSB01の2軒である。SB10は、床面の長径5.35m、短径4.4mの楕円形を呈する住居跡で、主柱穴6本（+α本）とそれに対応するビット群が壁溝中に7本認められる。従来、住居の壁近くに存在するビット群は、矢板を支えるための杭穴、さらに壁溝は、矢板をはめこむための溝と考えられている。しかし、SB10に関しては、地山面からの掘込みも非常に深く、壁溝中に主柱穴と同様な規模のビット群の存在は、矢板を支えるためのビットとは考えにくく上屋構造に密接に関わるものと考えられる。すなわち、「杭穴」¹⁾としてではなく「柱穴」²⁾として考えるのが妥当であろう。これに対し、B地点のSB01は、東側部分が流失しているが楕円形を呈する住居跡で壁高はさほど高くはない。主柱穴は現存で5本（中央1本）でそれに対応するビット群は壁溝中ではなく壁溝にやや入り込んだところにある。このSB01の主柱穴に対応するビット群は、SB10のそれとは異なり小形で浅く「柱穴」としてではなく「杭穴」とするのが妥当であろう。

以上、述べてきたがSB10のように斜面に立地し深く掘込まれた住居の構造は、平坦面に築造された住居とは一線を画するものと考えられよう。しかし、この種類の住居は、斜面に立地しているがための構造なのかあるいは時期差、地域差なのか、今後資料の増加を待ち検討したい。

袋状竪穴遺構（以下「袋状竪穴」）は、いわゆる「貯蔵穴」と考えられており、広島県内では、大朝町横路遺跡³⁾、広島市高陽台遺跡群⁴⁾、同市真亀遺跡群⁵⁾、東広島市鏡西谷遺跡⁶⁾、同市助平2号遺跡⁷⁾等でも確認されており、弥生時代前期より存在している。

当遺跡のA地点において袋状竪穴は10基検出された。しかし、「袋状竪穴」の実態にそぐわないものもあるが、一応断面が袋状あるいは筒状のものを総称して呼ぶことにした。袋状竪穴

は、丘陵の東西両斜面に5基ずつ群をなして認められ、丘陵東側ではSK05～09（A群）、西側ではSK02、11～14（B群）であった。築造時の状態に比較的近いと考えられるものは、床面形態、床面の規模そして床面標高であろう。それらの計測値に導かれつつまとめてみることにしよう。

床面形態は、楕円形を呈するもの（SK02、11、13）、隅丸方形を呈するもの（SK13）、楕円形に近い不整多角形を呈するもの（SK05、06、09、12、14）、そして不整形を呈するもの（SK07）の4つに分類することができる。さらに、床面の規模によって大形のもの（SK14）、中形のもの（SK02、05、06、07、12）、小形のもの（SK08、11、13）に分類することが可能である。また、ピットを有するもの¹⁾（SK11）、2段式のもの（SK02）、壁溝を有するもの²⁾（SK14）が存在する。床面の標高は、A群のSK05、09の2基が230.58、230.86m、SK06、07、08の3基が231.80～231.97m、B群の5基がいずれも231.30～231.45mの範囲で、ある程度同様なレベルである。こうして見てくると、この袋状堅穴のA・B両群は、一見床面の形態、規模を無視しているようではあるが、床面が同様なレベルであることは、築造時において意識的に床面のレベルを揃えたと考えられよう。また、1基も切合い関係が存在しないことからすると、A群の5基、B群の5基は多少の時間差を持ち同時共存したと推定されよう。このことから各住居跡との関係については推測の域を出ないが、SB10がSK11～14の4基の袋状堅穴を切っていることにより、SB10との同時共存は考えられず東側斜面に設けられたSK05、09あるいは06、07、08、02との共存が推定されよう。となるとSB01は、SK02、11～14の5基の袋状堅穴との同時共存の蓋然性が高い。しかし麓西谷遺跡の袋状堅穴にみられるように1軒の住居に近接して1基ないし2基設けられている例もある。この袋状堅穴については、機能の問題、集落内において共同体の規則による袋状堅穴群の共同使用、あるいは各住居の単独使用等の残された課題は多い。

古墳時代の調査の成果は、内部主体に横穴式石室をもつ古墳1基の発見である。古墳（ST03）は、後世の破壊を受けており、石室構造等の詳細は明確に把握することはできなかった。

墳丘は、封土が流失してしまっているため不明であったが、石室を覆う程度の封土があったものと想定できる。また、古墳に伴う周溝あるいは背面カットといった地山整形も不明であった。

石室の構造は、無袖式の横穴式石室であったと推定できる。石室の長さは現存長5.11m、最大幅1.4mを測り、やや胴張りの長方形プランを呈し、主軸方向はN-87°-Eをとりほぼ西に開口している。石室の高さは、奥壁の現存高0.9mを測りこの上に天井石があったにしては低すぎるためさらに1段ないし2段積んだのであろう。それは奥壁の上端に小石が残っているため理解できる。両壁面は1枚目の腰石を直立させる方法が採用されている。この用石法は東広島市八本松町藤ヶ迫第3号古墳¹⁾にみられる。また、南側壁面の奥壁より4枚目の腰石は割石を直立させる用石法を採用している。このことは石室の構築法を知るうえで興味深い。すなわ

ち南側壁面の中央付近に腰石を直立させるということは、奥壁、玄関部の両端から側壁を積み込んでゆき、割石の規格に不合が生じたため割石を直立せざるをえなかったと推定される。そしてその腰石が他の腰石より高いため、2段目の割石を積むことによって上端を整えその不合を解消している。しかし、横穴式石室は天井石を乗せて始めて石室としての意味があるものであり、この腰石を直立させるということは、天井石を乗せて状態での重量のかかり具合と密接に関係するものであるとも考えられる。奥壁と側壁の関係は「門」であった。次に埋葬は副葬された須恵器を観察することにより、最底2度の埋葬が行われていることを知ることができる。第1次埋葬は、36, 37, 38, 39, 40, 41, 44, 51, 52, 53, 54の杯蓋、杯身、碗、匙、提瓶が伴い、第2次埋葬は、43, 48, 49, 50の杯身、高杯が伴うと考えられる。また、後世の破壊により不明であったが、42, 45, 46, 47の杯身、高杯、壺は第2次埋葬に伴うと考えられ、多少の時間差を持ち埋葬されている。しかし、鉄鍔、耳環は、いずれの埋葬に伴うものか不明である。このような追葬の例は、比婆郡口和町池津第1号古墳¹⁰⁾、広島市給人原古墳群¹¹⁾、安芸郡海田町飲瓶音免第1号古墳¹²⁾、三次市四拾貫小原第16号古墳¹³⁾等で確認され、後期古墳においては一般的な在り方であろう。

さて、当古墳の構築時期であるが、出土した須恵器等により6C後半に比定され、7C前半に追葬が行われたと推定されよう。

- 註 1) 「杭穴」とは、矢板を支えるための穴と規定する。
 2) 「柱穴」とは、上層を支えるための穴と規定する。
 3) 横路遺跡調査団『横路遺跡』1982
 4) 広島市教育委員会『高陽台遺跡群』1982
 5) 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
 6) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』I 1982
 7) (財)広島県埋蔵文化財調査センターにより昭和57年調査。
 8) 広島市真電遺跡群で確認されている。註5)と同じ。
 9) 春日市門田遺跡社田地区で確認されている。福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集 1978
 10) 註6)と同じ。
 11) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告9集』1971
 12) 口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』1979
 13) 可部高等学校史学部「広島市可部町給人原古墳調査概報」『はにわ』第13号 1974
 14) 海田町教育委員会『飲瓶音免古墳群』1979
 15) 三次市教育委員会により昭和54年調査。